茨城県筑西市

板　堂　遺　跡

—発掘調査報告書—

2006

ヤシマ産業株式会社
筑西市教育委員会
山武考古学研究所

序

筑西市は、下館市・関城町・明野町・協和町の１市３町が合併し、平成17年３月28日に誕生しました。東京から北へ約70㎞、茨城県の西部に位置し、東西は約15㎞、南北は約20㎞で、面積は205.35㎢です。地形はおおむね平坦で、鬼怒川・小貝川などが南北に貫流し、肥沃な田園地帯を形成しています。

このたび、ヤシマ産業株式会社の倉庫新築工事にともない発掘調査を行った板堂遺跡は、五行川右岸台地上の折本地区に位置しており、周囲には板堂古墳や鷹の巣遺跡などの所在が知られ、古代から人びとの生活活動の場であったことを窺い知ることができます。

今回の調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡が３軒、平安時代の竪穴住居跡が４軒および古墳が２基確認され、当地域の文化の様相を解明する上で欠かすことのできない貴重な資料を得ることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解明する資料として広く活用されることを念願いたします。

最後になりましたが、今回の調査に際し多大なるご理解とご協力を賜りましたヤシマ産業株式会社、また発掘調査から報告書の作成に至るまでご尽力いただきました山武考古学研究所ならびに関係機関・関係各位に衷心より御礼申し上げ、報告書刊行の辞とさせていただきます。

平成18年３月

筑西市教育委員会
教育長　大泊　信雄

例　言

1．本書は、茨城県筑西市折本字板堂536-2外に所在する板堂遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、ヤシマ産業株式会社の倉庫建設に伴って行われたもので、ヤシマ産業株式会社から委託を受けた㈲山武考古学研究所が、筑西市教育委員会の指導のもとに行った。

3．調査の概要については以下の通りである。

遺　跡　名　　板堂遺跡
所　在　地　　茨城県筑西市折本字板堂536-2、539-1、540-5番地
調査面積　　1,594㎡
調査期間　　平成17年9月5日～同年10月3日
調査担当者　　高野浩之（山武考古学研究所所員）

4．本書の執筆は、Ⅰを筑西市教育委員会が、Ⅱ以下を高野浩之（山武考古学研究所）が行った。編集は筑西市教育委員会の指導のもと高野が行った。

5．調査に関わる遺物・図面・写真等の資料は、一括して筑西市教育委員会が保管している。

6．調査及び本書の作成にあたり、下記の諸機関にご協力を賜った。記して感謝する次第である。
（順不同・敬称略）

ヤシマ産業株式会社　　奥原建設株式会社　　有限会社新成田総合社　　有限会社カワヒロ産業

7．調査の参加者は以下の通りである。（順不同）

前橋廣男　　荒川　博　　五十嵐　隆　　鈴木正弘　　北原　隆　　木幡　光　　桑谷　守
斉藤三郎　　青木みね子　　飯泉利明　　飯泉鉄夫　　山崎智久　　江尻幸子　　根本己春
池野睦恵　　滝口幸子

凡　例

1．挿図中に記載した北は座標北を示す。

2．本遺跡の略称は「ITA」である。

3．各遺構の略称は以下の通りとし、写真撮影、遺物注記等に用いた。

ＴＭ･･･古墳　　ＳＩ･･･住居跡　　ＳＫ･･･土坑　　ＳＤ･･･溝　　Ｋ･･･撹乱　　Ｓ･･･石

4．挿図中で使用したスクリーントーン、記号は以下の通りである。

粘土　　焼土･土器赤彩　　調査区・土器黒色処理

●土器・鉄製品　▲玉類

目　　次

序

例言　凡例　目次

Ⅰ．調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅲ．試掘調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅳ．調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

　1．調査の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

　2．調査の経過　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

　3．基本堆積土層　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

Ⅴ．検出された遺構と遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

　1．古墳　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

　2．古墳時代住居跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

　3．古代住居跡　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

　4．土坑　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

　5．溝　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

Ⅵ．まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

抄録

表　目　次

第１表　試掘調査トレンチ一覧表・・・・・・・3

第２表　第１号墳出土遺物観察表（刀子）・・・・13

第３表　第２号墳出土遺物観察表（鉄製品）・・・13

第４表　第２号墳出土遺物観察表（玉類）・・・・13

第５表　古墳時代住居跡一覧表・・・・・・・・18

第６表　古墳時代住居跡出土遺物観察表・・・・18

第７表　古代住居跡一覧表・・・・・・・・・・・19

第８表　古代住居跡出土遺物観察表・・・・・・24

第９表　土坑一覧表・・・・・・・・・・・・・・24

第10表　溝一覧表・・・・・・・・・・・・・・・26

挿　図　目　次

第１図　調査区域図（1／2,500）・・・・・・・1

第２図　遺跡位置図１（1／25,000）・・・・・・2

第３図　遺跡位置図２（1／25,000）・・・・・・2

第４図　試掘調査遺構確認状況図及び出土遺物・4

第５図　基本堆積土層図・・・・・・・・・・・5

第６図　遺構全体図・・・・・・・・・・・・・6

第７図　第１号墳及び出土遺物・・・・・・・・8

第８図　第１号墳主体部・・・・・・・・・・・9

第９図　第２号墳・・・・・・・・・・・・・・10

第10図　第２号墳主体部及び出土遺物・・・・・11

第11図　第２号墳出土遺物・・・・・・・・・・12

第12図　第３号住居跡及び出土遺物・・・・・・14

第13図　第３号住居跡出土遺物・・・・・・・・15

第14図　第５号住居跡及び出土遺物・・・・・・16

第15図　第７号住居跡及び出土遺物・・・・・・17

第16図　第１号住居跡・・・・・・・・・・・・20

第17図　第２号住居跡・・・・・・・・・・・・・20
第18図　第４号住居跡・・・・・・・・・・・・・21
第19図　第６号住居跡・・・・・・・・・・・・・21
第20図　第１・２号住居跡出土遺物・・・・・・・22
第21図　第４・６号住居跡出土遺物・・・・・・・23
第22図　土　坑・・・・・・・・・・・・・・・・25
第23図　溝土層断面・・・・・・・・・・・・・・26

写真図版目次

ＰＬ １　１．１区全景　２．２区全景
ＰＬ ２　１．第１号墳全景　２．同主体部確認状況　３．同主体部全景　４．同主体部全景
５．同主体部側壁断面　６．同主体部完掘全景　７．第２号墳全景　８．同主体部確認状況
ＰＬ ３　１．第２号墳主体部全景　２．同主体部遺物出土状況　３．同主体部遺物出土状況
４．同主体部完掘全景　５．第３号住居跡全景　６．同遺物出土状況　７．同遺物出土状況
８．同貯蔵穴内遺物出土状況
ＰＬ ４　１．第５号住居跡全景　２．同遺物出土状況　３．同遺物出土状況　４．第７号住居跡全景
５．第１号住居跡全景　６．同カマド近景　７．第２号住居跡全景　８．第４号住居跡全景
ＰＬ ５　１．第６号住居跡全景　２．同遺物出土状況　３．同カマド１近景　４．同カマド２近景
５．第８号土坑全景　６．第16・17号土坑全景　７．第３・４号溝全景　８．第７号溝・19号土坑全景
ＰＬ ６　出土遺物１
ＰＬ ７　出土遺物２
ＰＬ ８　出土遺物３

Ⅰ．調査に至る経緯

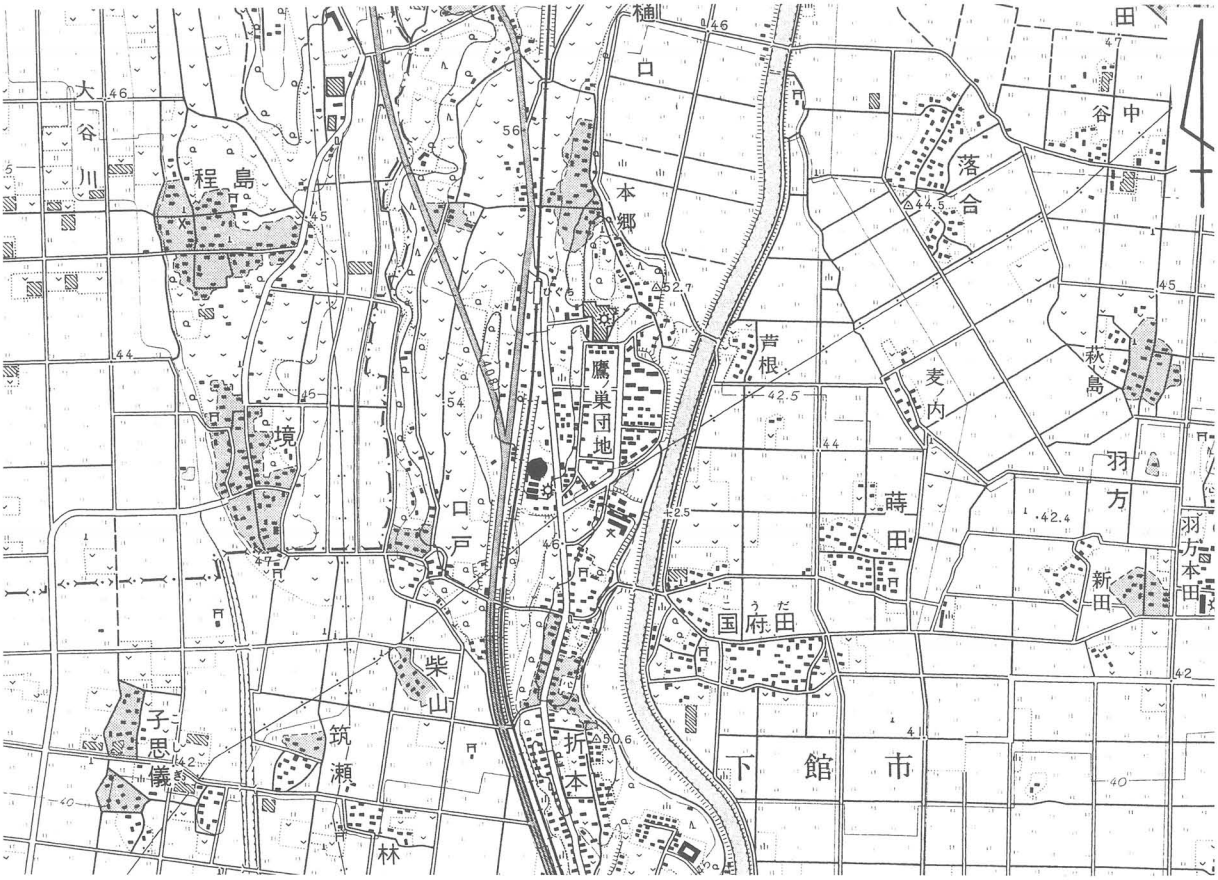
平成17年５月、ヤシマ産業株式会社から，筑西市折本字板堂536-2ほかにおける倉庫新築工事にともない、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて（照会）」が提出された。

照会に基づき、市教育委員会が同社の立会いのもとに現地踏査を行ったところ、開発予定地の全域にわたり遺物の散布を認めた。この結果、同社より同年６月15日付けで「遺跡発見の届出について」が提出され、板堂遺跡（市町村遺跡番号206073）として登録された。

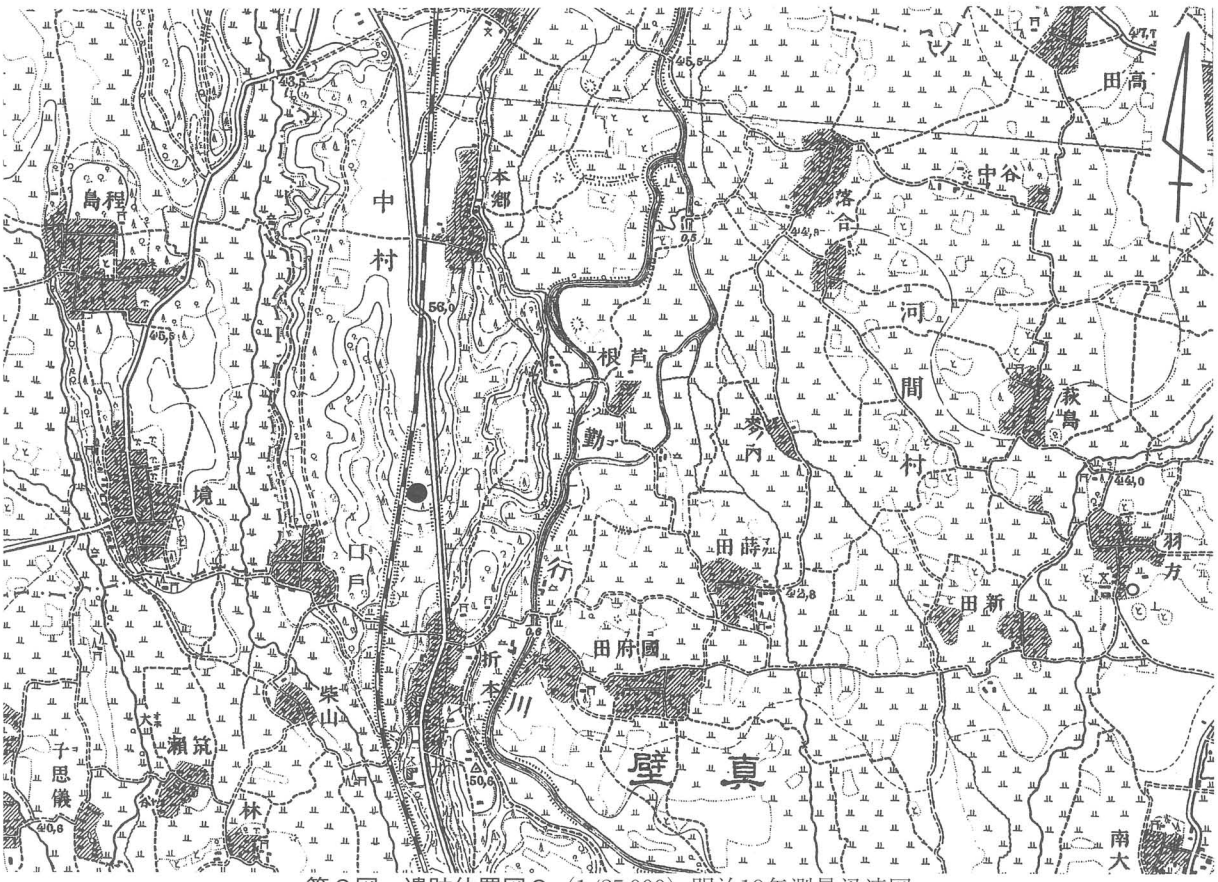
市教育委員会は，現地踏査の結果を踏まえ、同社に対して開発予定地の試掘調査を必要とする旨の回答を行い、同年７月19日から３日間の日程で試掘調査を実施した。試掘調査の結果、竪穴住居跡７軒、溝状遺構７条など遺構と遺物を確認したことから、遺跡の取り扱いについて再度協議を行なった。協議において、工事の設計変更が困難であるため、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

市教育委員会とヤシマ産業株式会社は協議により、発掘調査の実施に向けて具体的内容の調整を図り、調査を山武考古学研究所に委託することとした。その結果，ヤシマ産業株式会社、市教育委員会、山武考古学研究所の三者により調査を円滑に進めるための協定を締結するとともに、山武考古学研究所より同年８月31日付けで「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が提出された。調査経費についてはヤシマ産業株式会社が全額負担し、市教育委員会の指導のもと、山武考古学研究所が同年９月５日から10月３日まで発掘調査を行なった。

第１図　調査区域図（1/2,500）



第２図　遺跡位置図１（1/25,000）



第３図　遺跡位置図２（1/25,000）明治19年測量迅速図

Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境

板堂遺跡の所在する筑西市は、栃木県境に接する茨城県西部にあって、平成17年３月に４市町（下館市・関城町・明野町・協和町）の合併によって誕生した。合併後の市域は東西約15km、南北約20km、面積は205.35㎢と広大である。北は栃木県、南はつくば市と接し、東は桜川市、西は鬼怒川を挟み結城市、八千代町と接する。板堂遺跡が所在する旧下館市の地形は、東に小貝川、西に鬼怒川、中央に五行川が南北に流れ、流域には広大な沖積低地が広がる。これら河川間には栃木県から真岡線沿いに細長く延びる台地、旧協和町に接する台地、鬼怒川東岸の旧関城町に至る台地がある。板堂遺跡は、栃木県二宮町から五行川に沿って南北に延びる細長い台地上にあり、複雑に入り組んだ小支谷が遺跡の両側に入り込むことで形成された舌状台地南側縁辺部に立地している。

市内の遺跡は、河川沿いに多くの遺跡が分布している。縄文時代は、前期の下江連地区十二天遺跡、中期の前原遺跡、大関遺跡、後晩期の外塚遺跡、弁天遺跡等がある。弥生時代は、標識遺跡となった女方遺跡が有名である。古墳時代は、旧協和町小栗地内の丑塚古墳群、寺山古墳群があり、多数の直刀、副葬品等が出土している。板堂遺跡の南方300m地点にある八丁台遺跡では川原石小口積みの主体部を有する古墳が検出されている。また、鬼怒川流域には女方古墳群、弁天古墳群が所在する。集落では中期末から後期初頭の野殿深作遺跡がある。奈良・平安時代は、旧協和町に新治郡衙・新治廃寺が置かれ、鬼怒川の対岸では峰崎遺跡、下り松遺跡といった大規模な集落が見られる。

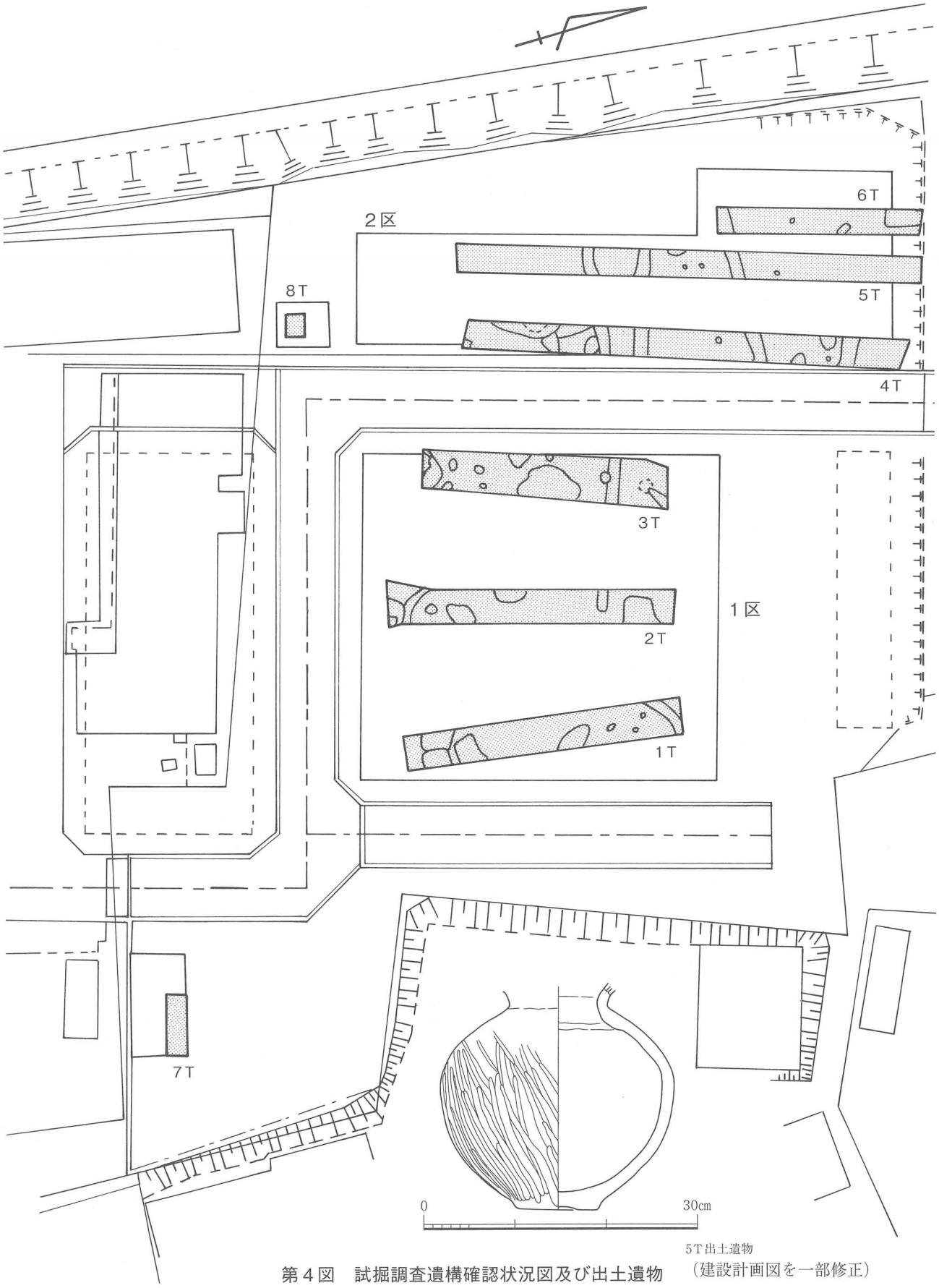
Ⅲ．試掘調査の概要

試掘調査は、倉庫建設区域２地点、防火水槽設置区域２箇所に８本のトレンチを設定し遺構の有無を確認した。トレンチは「T」の記号を付して記録している。各トレンチの内容については第１表に記した。倉庫建設区域の南側は、工場施設が現存したために、５～８m程北側へ設定をずらして確認を行う。

調査の結果、倉庫建設区域（１～６T）では、住居跡８軒、土坑９基、ピット12基、溝４条が確認された。防火水槽設置区域（７・８T）では、ハードローム層を切り込んでかなりの深さまで撹乱を受け、遺構は確認されなかった。その後行った本調査によって、１T南側で重複すると考えられた住居跡は溝、１T北側溝は古墳の周溝、４Tの住居跡は５Tの溝と接続して古墳の周溝である事などが判明し、各遺構の数が試掘調査時とは増減するが、概ね調査の成果は得られた。出土した遺物は古墳時代の土師器片が主体で、５T南端の木根の下から古墳時代前期の小型壺が出土している。１・２両調査区の南側は工場施設撤去後に確認を行ったが、天地返しを受けて確認面下まで破壊されており、遺構の確認は不可能な状況であった。

第１表　試掘調査トレンチ一覧表

トレンチ番号	規模（m）長さ×幅	面積（㎡）	深度（cm）	検出遺構	出土遺物	備考
１T	25.2 × 3	75.6	37～40	竪穴住居跡３軒、ピット３基、溝１条、風倒木痕１	土師器	
２T	26.2 × 3	78.6	38～56	竪穴住居跡２軒、土坑２基、溝１条、風倒木痕２	なし	
３T	22.3 × 3	66.9	30～51	竪穴住居跡１軒、土坑４基、ピット３基、溝１条、風倒木痕３	土師器	溝は4T,5Tへ連続する。
４T	50.2 × 2	100	40～45	竪穴住居跡１軒、土坑２基、ピット２基、溝４条、風倒木痕１、不明２	土師器	溝３条は、3T～6Tへ連続する。
５T	42.2 × 2	84.4	30～52	土坑１基、ピット３基、溝３条	土師器	溝は3T～6Tへ連続する。
６T	18.2 × 2	36.4	31～42	竪穴住居跡１軒、土坑１基、ピット１基、溝１条	土師器	溝は4T,5Tへ連続する。
７T	2 × 2	3	92	なし	なし	全体に撹乱
８T	5.5 × 2	8.25	50～70	なし	土師器	全体に撹乱



第４図　試掘調査遺構確認状況図及び出土遺物　（建設計画図を一部修正）

Ⅳ. 調査の概要

1．調査の方法

調査は、先に行われた試掘調査を基に、倉庫建設が予定されている２地点全域を調査区とし、東側を１区、西側を２区として区別した。

表土除去は重機を用いて遺構確認面まで慎重に掘り下げ、遺構確認及び遺構の掘り下げは人力で行った。測量は世界測地系より求めたＸ軸＝+39,260m、Ｙ軸＝-12,260m を基準とし、調査区全体を網羅する10m×10mのグリッドを設定した。グリッドは北から南へはアルファベット、西から東へは算用数字で表し、「Ａ１，Ａ２，Ａ３，・・・」と呼称し、実測及び遺物取り上げの基準とした。実測は住居跡、土坑は１/20縮尺、住居跡カマド及び炉、古墳主体部は１/10縮尺、溝・周溝等は１/40縮尺をそれぞれ用いた。写真は35㎜判白黒フィルム、同判カラーリバーサルフィルムを使用し、必要に応じて６×７判白黒フィルムを併用した。写真撮影の記録は35㎜判白黒フィルムに写し込んだ。実測及び写真撮影は調査の過程で随時行った。

2．調査の経過

９月５日　調査開始。重機及び施設・発掘器材搬入。１区より表土除去開始。

８日　１区表土除去終了。この日より作業員を投入し、１区遺構確認を開始。併せて２区表土除去を開始。

９日　１区遺構確認を終了。遺構確認状況写真撮影後、遺構の掘り下げを開始。住居跡の掘り下げから行う。

10日　１区１号墳の主体部調査を開始。２区表土除去終了。重機搬出。

12日　基準点測量。併せてグリッド杭・水準点の設置。重複住居跡を再確認し、溝であることが判明する。

15日　１号墳主体部より遺物出土。１・２・４・６号住居跡はカマド調査を開始。

16日　３・４号溝掘り下げ開始。各住居跡の床・壁の精査作業。

19日　１号墳主体部のベルト除去、石室内精査。３号住居跡の貯蔵穴掘り下げ。出土遺物確認。

20日　２区遺構確認作業開始。遺構確認状況写真撮影終了後、２号墳の主体部調査を開始。

21日　２区遺構の掘り下げ開始。１区各住居跡の写真撮影。

27日　１区住居跡の調査を終了。１・４号溝の掘り下げ。

28日　１号墳主体部を完掘。２区住居跡の床・壁精査。５～７号溝掘り下げ。

30日　２区住居跡の調査を終了する。16･17号土坑掘り下げ。

10月１日　１区全体写真撮影。２号墳主体部を完掘。

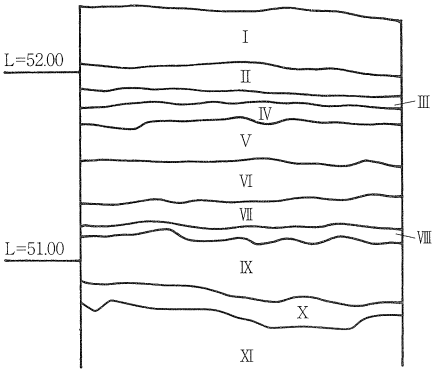
３日　２区全体写真撮影。終了確認。施設・発掘器材搬出。現地発掘調査を完了する。

3．基本堆積土層

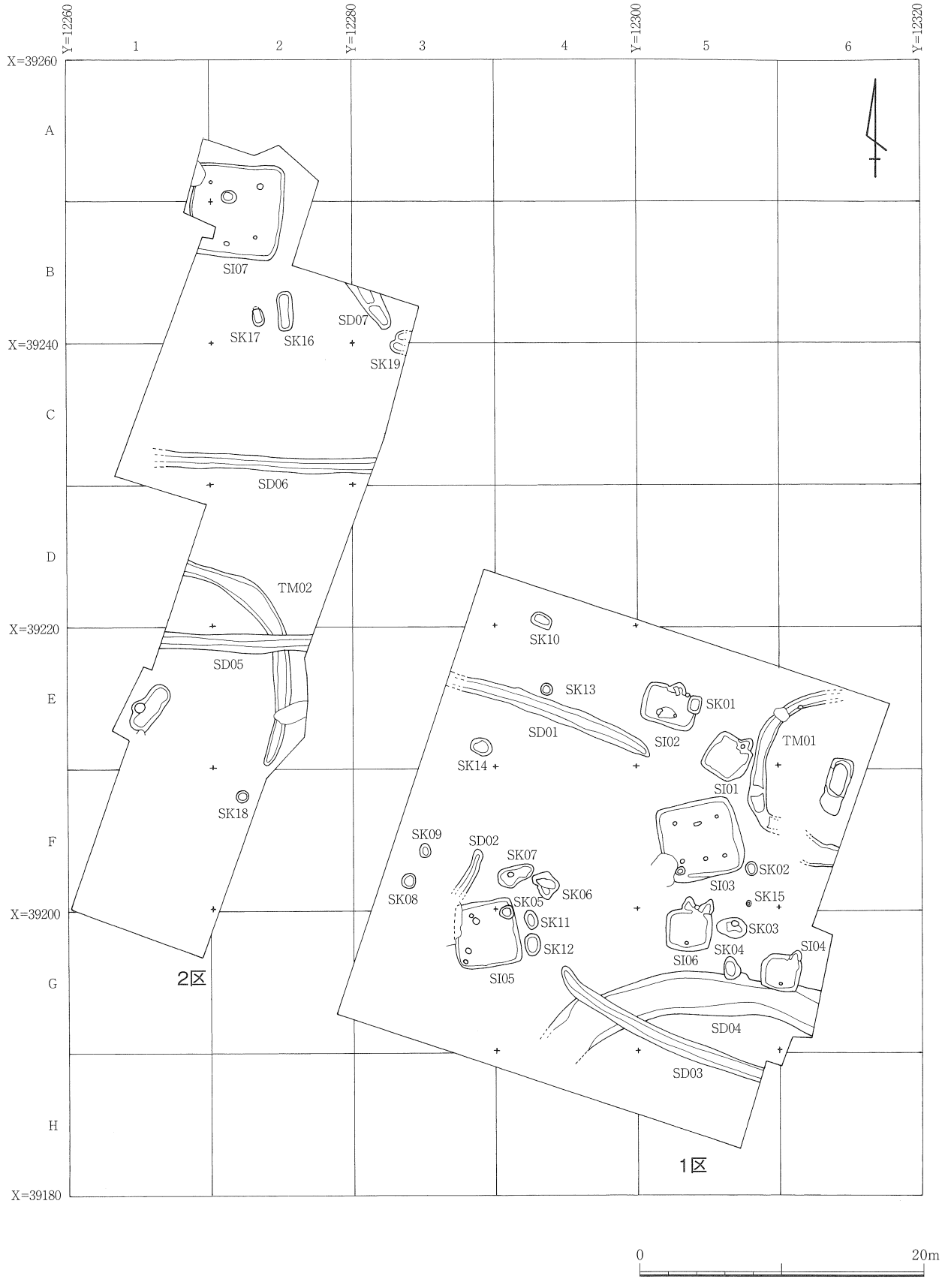
基本堆積土層は１・２両調査区のほぼ中央地点にあたるＥ５グリッド付近で2×2m四方の試掘坑を設定し、観察を行った。

基本層序

Ⅰ	黒褐色土	7.5YR3/1	表土。腐植土。しまり弱い。粘性なし。
Ⅱ	黒褐色土	7.5YR3/2	表土。しまりなし。粘性なし。
Ⅲ	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム粒、ロームブロック少量。しまりなし。粘性なし。
Ⅳ	暗褐色土	7.5YR3/4	上面遺構確認面。ローム直上の漸移層。
Ⅴ	褐色土	7.5YR4/4	ロームやや軟質。しまりあり。粘性あり。
Ⅵ	褐色土	7.5YR4/3	ハードローム。しまり強い。粘性あり。
Ⅶ	暗褐色土	7.5YR3/4	しまりあり。粘性あり。
Ⅷ	暗褐色土	7.5YR3/4	ローム混入。しまりあり。粘性あり。
Ⅸ	褐色土	7.5YR3/4	鹿沼土微量。しまり強い。粘性強い。
Ⅹ	明褐色土	7.5YR5/8	鹿沼土少量。しまり強い。粘性強い。
Ⅺ	橙色土	7.5YR6/8	砂粒土。鹿沼土。しまりあり。粘性なし。



第５図　基本堆積土層図


Y=12260
Y=12280
Y=12300
Y=12320
1
2
3
4
5
6
X=39260
X=39240
X=39220
X=39200
X=39180
A
B
C
D
E
F
G
H
SI07
SK17
SK16
SD07
SK19
SD06
TM02
SD05
SK18
2区
SK10
SK13
SD01
SK01
SI02
TM01
SK14
SI01
SK09
SD02
SK07
SK02
SI03
SK08
SK05
SK06
SK15
SK11
SK03
SK12
SK04
SI04
SI06
SI05
SD04
SD03
1区
0
20m

第６図　遺構全体図

Ⅴ．検出された遺構と遺物

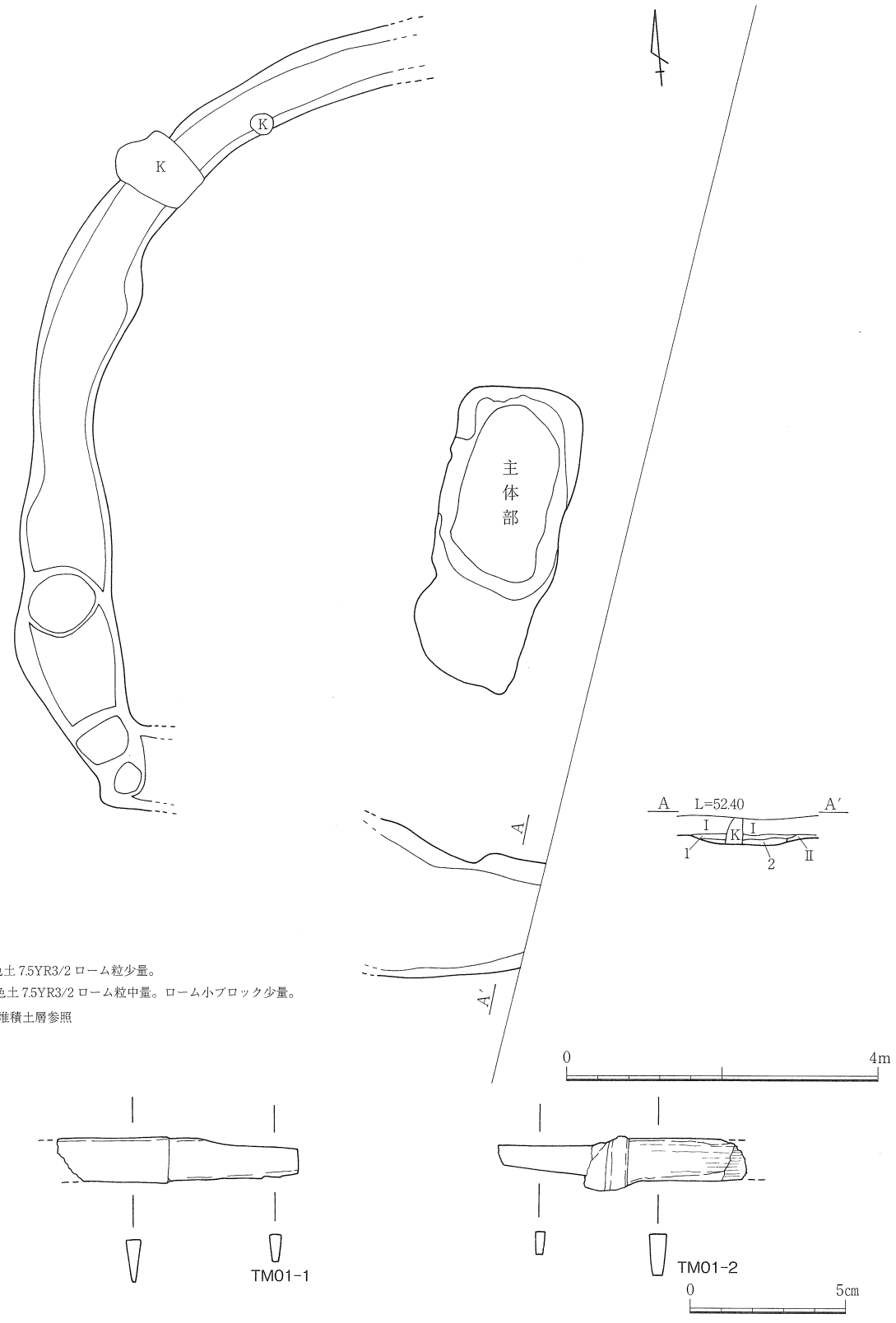
１．古墳（第7～11図）

１・２両区で各１基の古墳を確認する。両古墳とも墳丘は消滅しており、周溝の一部と主体部を確認する。

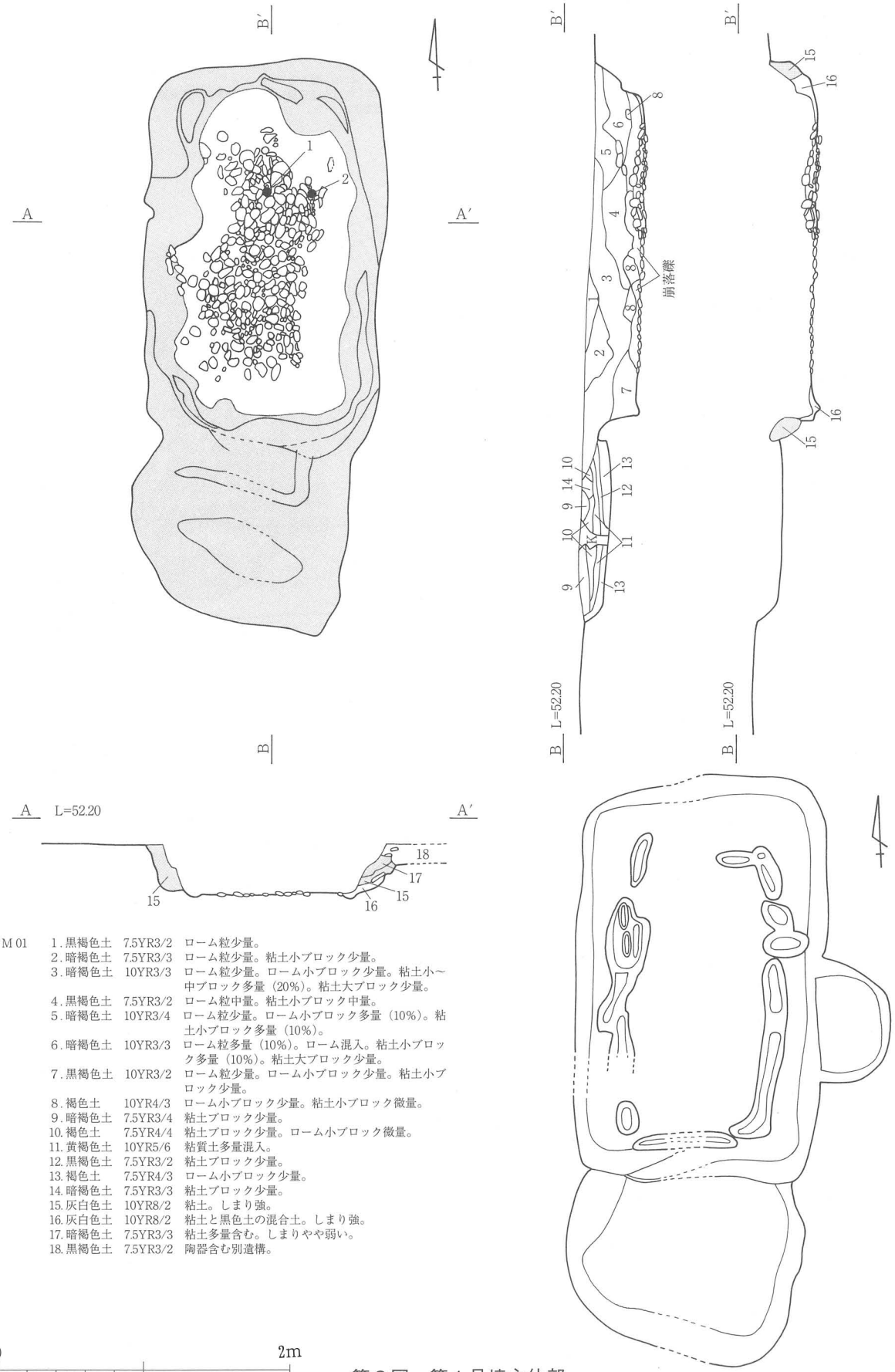
第１号墳は１区の北東側、Ｅ５・６、Ｆ５・６グリッドに位置する。本墳の規模は、東側が調査区外となり１/２の確認に留まるが、周溝内側の立ち上がり部分からの径約10.1ｍの円墳と推測される。周溝は上面の大部分が削平され、底面が確認されるのみであった。確認し得る規模は、削平が著しい北側で上幅0.72～0.78ｍ、底幅0.41～0.47ｍ、深さ６cm、最も遺存の良い南側で上幅1.54～2.00ｍ、底幅1.06～1.82ｍ、深さ10cmで、断面形状は逆台形を呈したもの思われる。主体部は、本墳のほぼ中央に位置するものと思われ、主軸はN-15°-Eを示す。上部は削平を受けているが、玄室と思われる掘り込みを確認したほか、玄室南側では羨道部分にあたると思われる粘土の広がりが確認された。玄室は、長さ2.76ｍ、幅1.71ｍ、現存する深さ34cmの箱形を呈し、掘り方内に粘土主体の土が壁面全体に接着している。覆土中には長さ30～50cm程の小石が含まれていることから、これらの小石を用いて石室を構築していたものと推測される。床面は大きさ７～12cm程の扁平な川原石を選りすぐり、掘り込んで平坦にしたローム面に直に敷き詰めて平坦面を構築している。石室中央から北側で床上に川原石を積み上げて10cm程高くした高まりがあり、石枕としての機能を果たしたものと考えられる。床下は平坦なローム面で、壁から９～16cm程内側で小溝状又は楕円形状の浅い掘り込みが北壁側を除き巡っている。溝状の掘り込みはきれいな線状を呈さず、幅９～30cmと差があり底面も凹凸が激しく、分断される部分もあることから、楕円形状の掘り込みと併せて石積みの基底部となる掘り込みと思われる。出土遺物は刀子２点が出土し、２点とも石枕の機能を有したと思われる高まりの上面で出土している。石室内からは覆土中及び床下より若干の土器片が出土するが時期決定には至らない。周溝内からは古墳時代前期と思われる器台の一部が出土するが周辺住居跡からの流れ込みと思われる。

第２号墳は２区の南側、Ｄ１・２、Ｅ１・２グリッドに位置する。本墳の北側を第５号溝が分断し周溝の一部を壊しているが、底面までには及んでいない。本墳の規模は、西側が調査区外となるほか、本来はＦ１・２グリッド地点まで広がっていたと考えられる部分が削平されているため、１/４程度の確認に留まるが、主体部を中心として見た場合、周溝内側の立ち上がり部分からの径は約18ｍ前後の円墳であったと推測される。周溝の規模は、上幅1.16～1.22ｍ、底幅0.46～0.94ｍ、深さ13～19cmで、断面形状は逆台形を呈する。周溝北東側で、上幅1.80ｍ、底幅1.24ｍと一部広がる部分が見られるが木根による撹乱が影響したものと考えられる。東側では他より７～13cm程深くなる部分が認められる。主体部は、本墳のほぼ中央に位置し、主軸はN-44°-Eを示す。上部は削平を受けているが、玄室と思われる掘り込みが確認されている。玄室は、北東側が木根により撹乱を受け、正確な長さは不明であるが、長さ3.00ｍ、幅1.73ｍの規模と推測される。現存する深さ20cmの掘り方で、形状は平面形が長方形で長軸方向に若干の膨らみを見せている。断面形状は箱形を呈し、掘り方内に粘土主体の土が壁面に接着している。南西側壁面では、長さ20～22cmの石が内側に差し込む形で確認されているが。同様の石は覆土中にはほとんど含まれていない。床面は、掘り込んで平坦にしたローム面に直に２cm弱の小石を全体に敷き詰め、さらに上面に５cm以内の小石を敷き詰めて平坦面を構築している。床下は平坦なローム面で、壁から14～18cm程内側の西壁側で小溝状の、東壁側で楕円形状の浅い掘り込みが確認される。溝状の掘り込みはきれいな線状を呈さず、幅10～14cm、底面は凹凸が見られる。第１号墳と同様、楕円形状の掘り込みと併せて石積みの基底部となる掘り込みと思われる。出土遺物は、床下より出土した鉄製耳環１点、玉類は、大小の管玉４点、臼玉１点、棗玉１点、小玉32点、丸玉２点が出土

している。出土位置が確認できたのは、耳環と管玉の一部、臼玉で、小玉・丸玉等は篩によって採取したものである。



第７図　第１号墳及び出土遺物

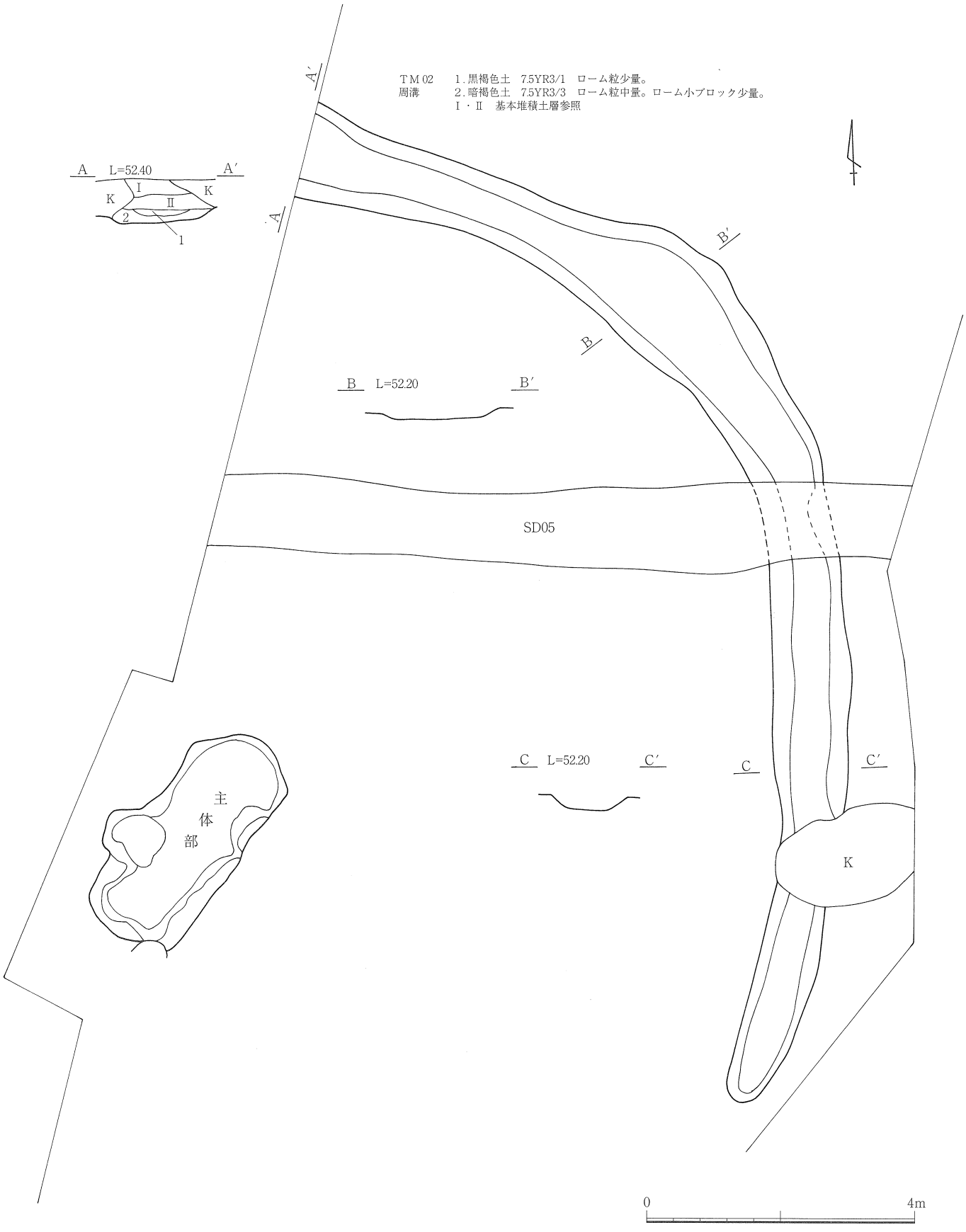


TM01

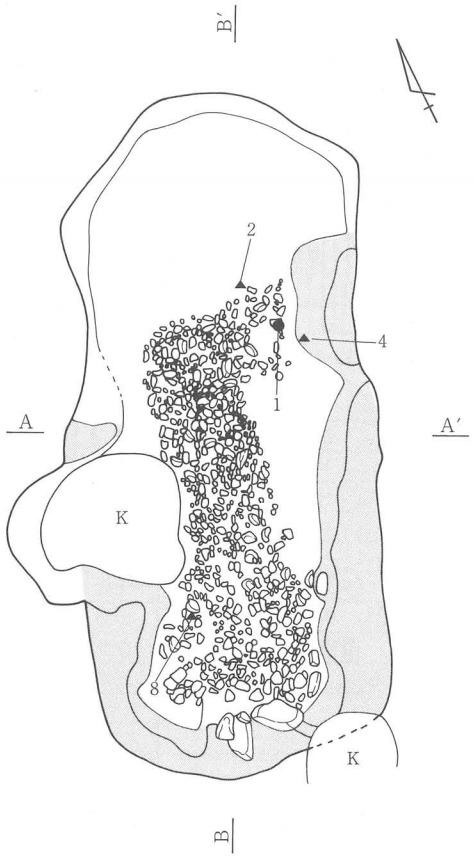
1.	黒褐色土	7.5YR3/2	ローム粒少量。
2.	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム粒少量。粘土小ブロック少量。
3.	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒少量。ローム小ブロック少量。粘土小～中ブロック多量（20%）。粘土大ブロック少量。
4.	黒褐色土	7.5YR3/2	ローム粒中量。粘土小ブロック中量。
5.	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量。ローム小ブロック多量（10%）。粘土小ブロック多量（10%）。
6.	暗褐色土	10YR3/3	ローム粒多量（10%）。ローム混入。粘土小ブロック多量（10%）。粘土大ブロック少量。
7.	黒褐色土	10YR3/2	ローム粒少量。ローム小ブロック少量。粘土小ブロック少量。
8.	褐色土	10YR4/3	ローム小ブロック少量。粘土小ブロック微量。
9.	暗褐色土	7.5YR3/4	粘土ブロック少量。
10.	褐色土	7.5YR4/4	粘土ブロック少量。ローム小ブロック微量。
11.	黄褐色土	10YR5/6	粘質土多量混入。
12.	黒褐色土	7.5YR3/2	粘土ブロック少量。
13.	褐色土	7.5YR4/3	ローム小ブロック少量。
14.	暗褐色土	7.5YR3/3	粘土ブロック少量。
15.	灰白色土	10YR8/2	粘土。しまり強。
16.	灰白色土	10YR8/2	粘土と黒色土の混合土。しまり強。
17.	暗褐色土	7.5YR3/3	粘土多量含む。しまりやや弱い。
18.	黒褐色土	7.5YR3/2	陶器含む別遺構。

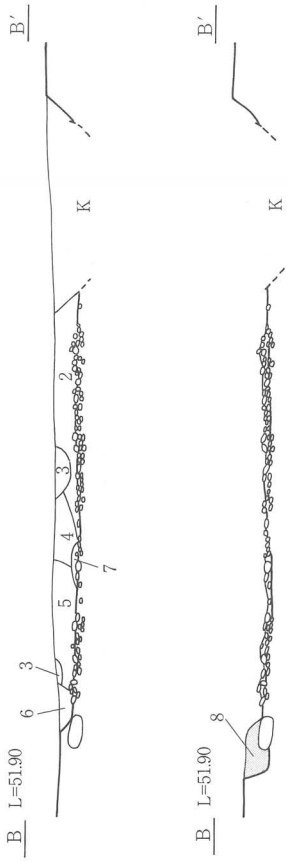
0　2m

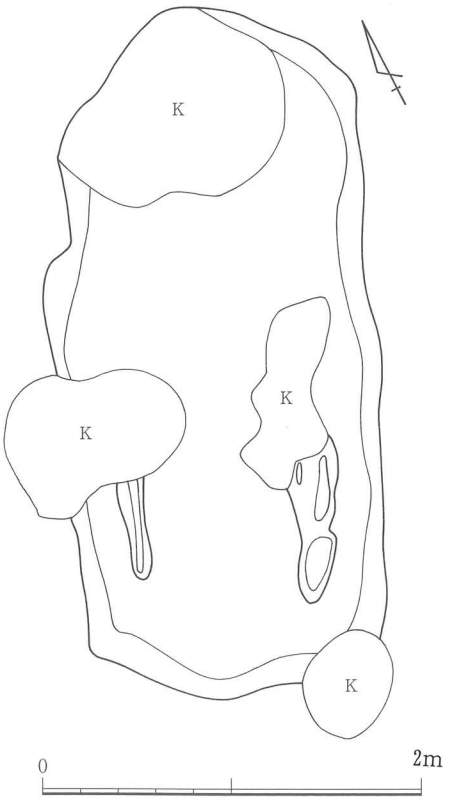
第8図　第1号墳主体部


TM02
周溝
1.黒褐色土　7.5YR3/1　ローム粒少量。
2.暗褐色土　7.5YR3/3　ローム粒中量。ローム小ブロック少量。
Ⅰ・Ⅱ　基本堆積土層参照
A　L=52.40　A′
K
Ⅰ
Ⅱ
K
2
1
A
A′
B
B′
B　L=52.20　B′
SD05
C　L=52.20　C′
C
C′
主
体
部
K
0
4m

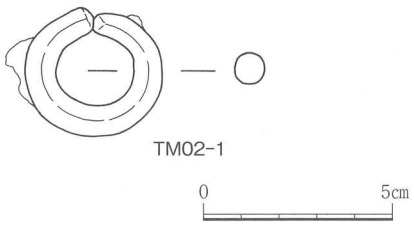
第９図　第２号墳



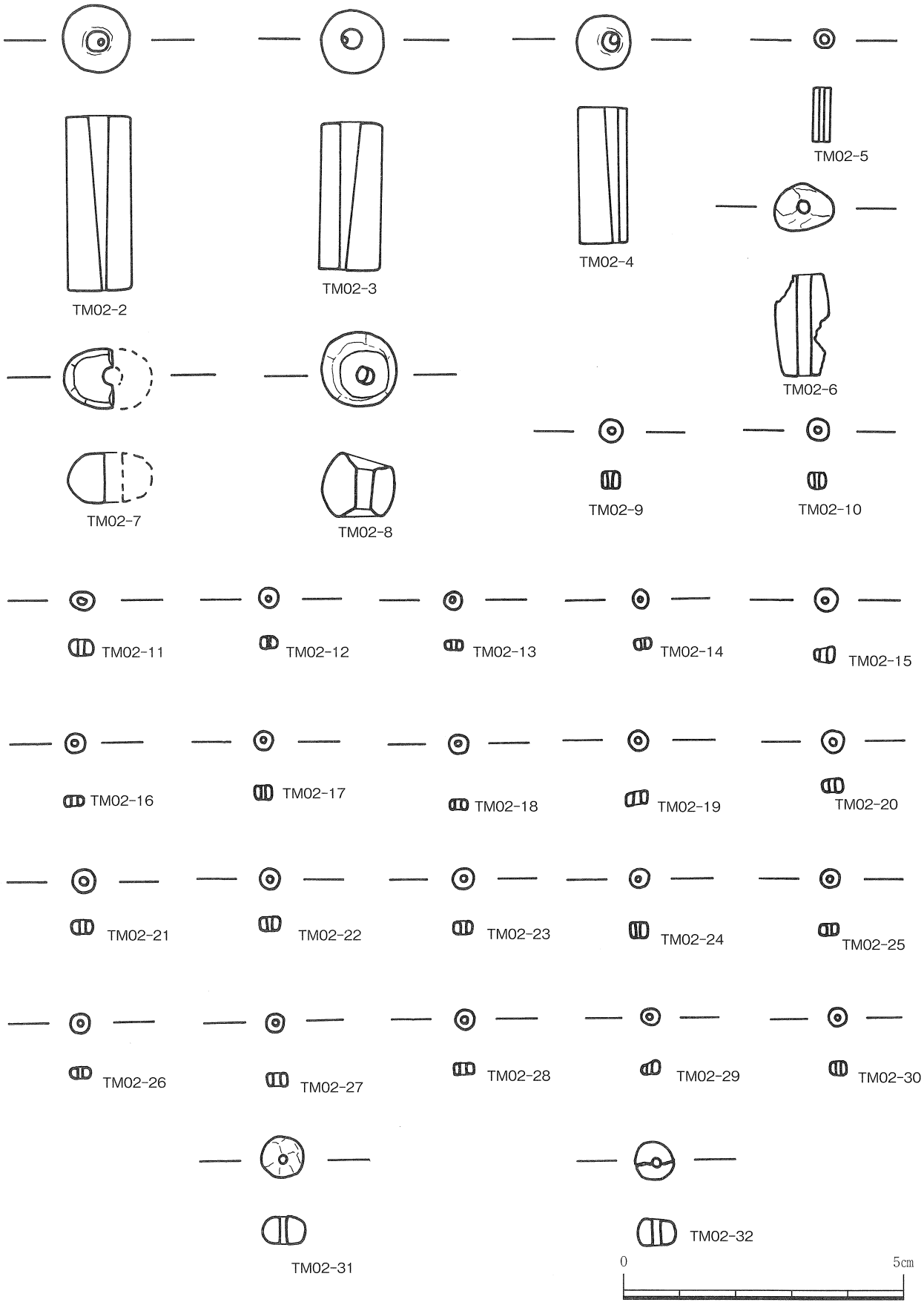




TM02　1.暗褐色土　7.5YR3/4　ローム粒少量。木根による撹乱と思われる。
2.暗褐色土　10YR3/4　粘土小～中ブロック少量。
3.暗褐色土　10YR3/4　粘土小～中ブロック多量（20%）。
4.褐色土　10YR4/6　粘土中～大ブロック多量（40%）。
5.暗褐色土　10YR3/4　粘土小～中ブロック多量（5%）。
6.暗褐色土　10YR3/3　粘土小ブロック微量。ローム粒少量。
7.褐色土　10YR4/6　ローム粒少量。
8.灰白色土　10YR8/2　粘土と黒色土の混合土。しまり強。



第10図　第2号墳主体部及び出土遺物



第 11 図　第 2 号墳出土遺物

第２表　第１号墳出土遺物観察表（刀子）

(cm)

遺物番号	全長	刃部			茎部			遺存度	図版番号	備考
		長さ	幅	重ね	長さ	幅	重ね			
TM01－1	(7.7)	(3.50)	1.40	0.50	(4.20)	1.30	0.40	1／2残存	第７図	
TM01－2	(8.0)	(2.90)	0.80	0.30	(5.10)	1.30	0.55	1／2残存	第７図	

第３表　第２号墳出土遺物観察表（鉄製品）

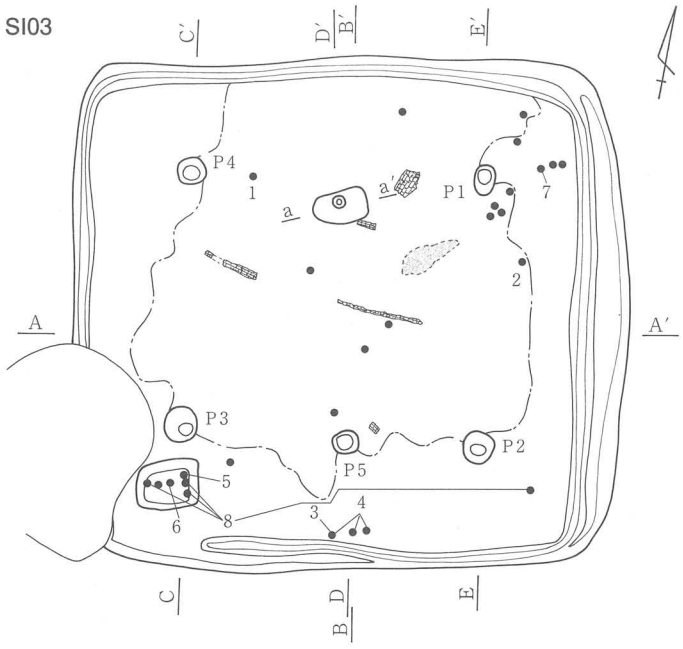
(cm)

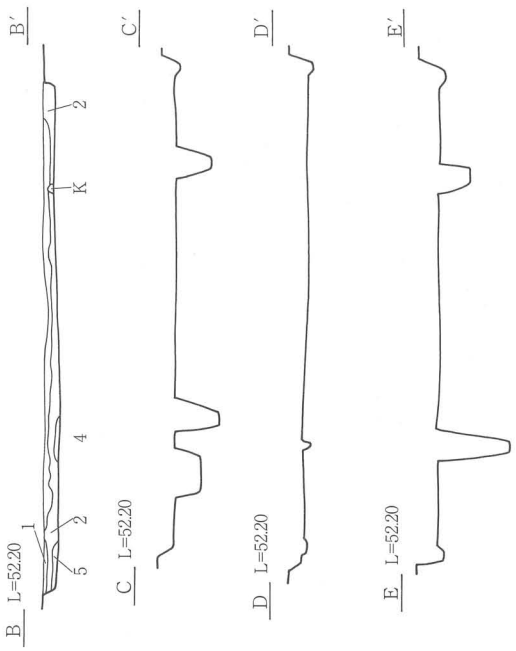
遺物番号	外径	内径	断面径	重さ（g）	遺存度	図版番号	備考
TM02－1	3.41 ～ 3.60	1.9 ～ 2.1	0.8	23.05	完形	第 10 図	耳環・鉄製

第４表　第２号墳出土遺物観察表（玉類）

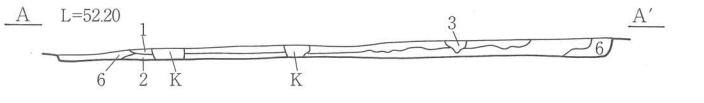
(mm)

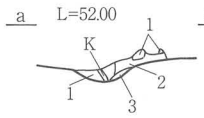
遺物番号	材質	長さ	径（たて×よこ）	厚さ	孔径	重さ（g）	色調	遺存度	図版番号	備考
TM02－2	碧玉	31.0	11.0 × 12.0	－	3.0 ～ 1.0	8.23	深緑色	完形	第 11 図	管玉
TM02－3	碧玉	26.0	11.0 × 11.0	－	3.0 ～ 1.0	6.35	深緑色	完形	第 11 図	管玉
TM02－4	碧玉	24.0	11.0 × 10.0	－	2.5 ～ 1.0	3.48	深緑色	完形	第 11 図	管玉
TM02－5	碧玉	10.0	3.5 × 3.5	－	1.0 ～ 1.0	0.12	濃深緑色	完形	第 11 図	管玉
TM02－6	琥珀	18.0	最大幅 11.0	7.0	2.0 ～ 2.0	0.84	暗赤褐色	一部欠損	第 11 図	棗玉
TM02－7	琥珀	8.8	最大幅 －	－	－	0.49	暗赤褐色	不明	第 11 図	穿孔あり
TM02－8	滑石	－	13.0 × 13.0	11.0	2.5 ～ 2.5	2.81	灰色	完形	第 11 図	臼玉
TM02－9	ガラス	－	4.0 × 4.0	4.0	1.0 ～ 0.7	0.05	青緑色	完形	第 11 図	小玉
TM02－10	ガラス	－	4.0 × 4.0	4.0	0.9 ～ 0.7	0.05	青緑色	完形	第 11 図	小玉
TM02－11	ガラス	－	3.0 × 4.0	3.0	1.5 ～ 1.0	0.04	青緑色	完形	第 11 図	小玉
TM02－12	ガラス	－	3.5 × 3.5	3.0	1.0 ～ 0.7	0.06	青緑色	完形	第 11 図	小玉
TM02－13	ガラス	－	3.5 × 3.5	1.5	0.8 ～ 0.5	0.01	青緑色	完形	第 11 図	小玉
TM02－14	ガラス	－	3.5 × 3.0	2.0	0.8 ～ 0.5	0.01	青緑色	完形	第 11 図	小玉
TM02－15	ガラス	－	4.0 × 4.0	3.0	1.0 ～ 1.0	0.04	青緑色	完形	第 11 図	小玉
TM02－16	ガラス	－	3.5 × 3.5	2.0	1.0 ～ 1.0	0.01	青緑色	完形	第 11 図	小玉
TM02－17	ガラス	－	4.0 × 4.0	3.0	1.0 ～ 0.8	0.03	青緑色	完形	第 11 図	小玉，不透明
TM02－18	ガラス	－	4.0 × 4.0	2.0	1.0 ～ 1.0	0.01	青緑色	完形	第 11 図	小玉，不透明
TM02－19	ガラス	－	3.5 × 3.5	2.5	1.0 ～ 1.0	0.01	青色	完形	第 11 図	小玉
TM02－20	ガラス	－	4.0 × 4.0	3.0	1.0 ～ 1.0	0.05	水色	完形	第 11 図	小玉
TM02－21	ガラス	－	4.0 × 4.0	3.0	1.0 ～ 0.8	0.04	群青	完形	第 11 図	小玉
TM02－22	ガラス	－	4.0 × 4.0	3.0	1.0 ～ 0.6	0.05	群青	完形	第 11 図	小玉
TM02－23	ガラス	－	4.0 × 4.0	2.0	1.0 ～ 0.8	0.04	群青	完形	第 11 図	小玉
TM02－24	ガラス	－	4.0 × 4.0	3.0	1.0 ～ 0.8	0.04	群青	完形	第 11 図	小玉
TM02－25	ガラス	－	3.5 × 3.0	2.0	1.0 ～ 0.6	0.01	群青	完形	第 11 図	小玉
TM02－26	ガラス	－	4.0 × 4.0	2.0	1.0 ～ 0.8	0.01	群青	完形	第 11 図	小玉
TM02－27	ガラス	－	3.5 × 3.5	2.5	1.0 ～ 1.0	0.01	群青	完形	第 11 図	小玉
TM02－28	ガラス	－	3.5 × 3.5	2.0	1.0 ～ 1.0	0.01	群青	完形	第 11 図	小玉
TM02－29	ガラス	－	3.0 × 3.0	2.0	1.0 ～ 0.8	0.01	群青	完形	第 11 図	小玉
TM02－30	ガラス	－	3.0 × 3.0	2.0	1.0 ～ 0.7	0.01	群青	完形	第 11 図	小玉
TM02－31	土製	－	7.5 × 7.0	5.0	1.0 ～ 1.0	0.27	黒色	完形	第 11 図	丸玉，表面漆塗装
TM02－32	土製	－	6.5 × 7.0	5.0	1.5 ～ 1.5	0.21	褐色	完形	第 11 図	丸玉



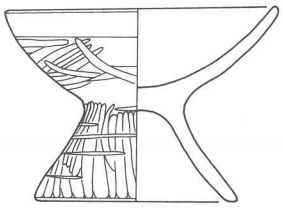


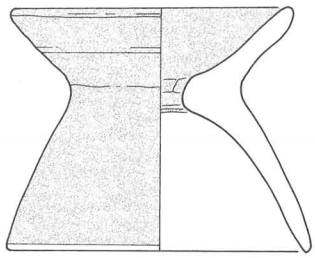
SI03　1.暗褐色土　7.5YR3/3　ローム粒中量。焼土粒微量。
2.黒褐色土　7.5YR3/2　ローム粒少量。炭化粒少量。炭化小ブロック少量。焼土粒微量。焼土小ブロック少量。
3.黒褐色土　7.5YR3/1　ローム粒少量。
4.黒褐色土　7.5YR2/2　ローム小ブロック少量。焼土小～中ブロック中量。炉上面層。
5.暗赤褐色土　5YR3/6　ローム粒少量。
6.暗褐色土　5YR3/4　ローム粒少量。

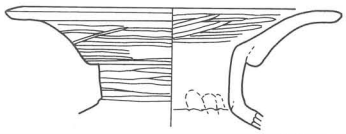


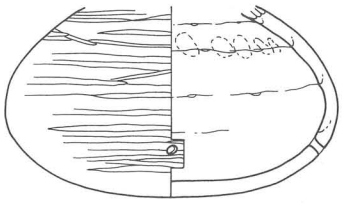


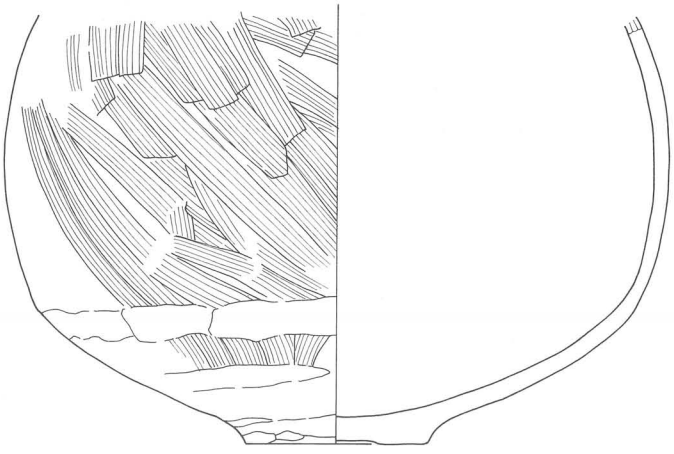
SI03　炉　1.明赤褐色　2.5YR5/8　焼土ブロック。
2.明赤褐色　2.5YR5/8　明褐色 7.5YR5/6 の混合土
3.褐色土　7.5YR4/6　ローム粒・焼土粒多量（10%）

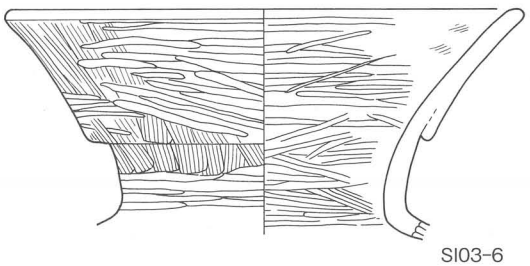

SI03-1


SI03-2


SI03-3


SI03-4


SI03-5


SI03-6

第 12 図　第３号住居跡及び出土遺物

2．古墳時代住居跡（第12図～第15図）

古墳時代の住居跡は１区で第３・５号住居跡の２軒、２区で第７号住居跡の１軒が確認されている。いずれも古墳時代前期のものと考えられるが、規模、主軸等に若干の差異が窺える。規模等各住居跡の詳細については第５表に記した。

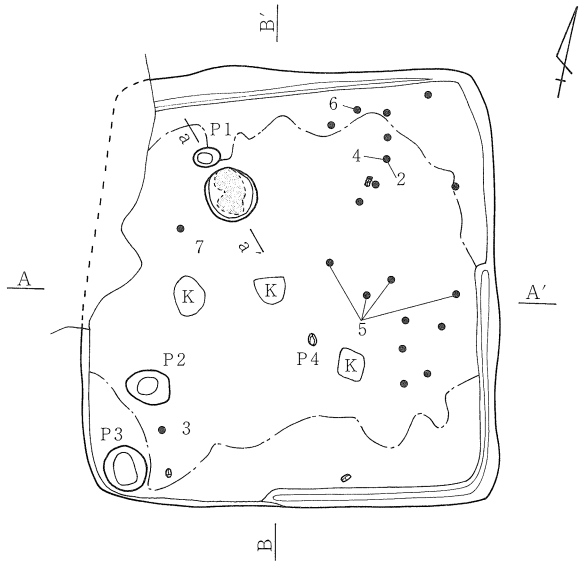
第３号住居跡は方形を呈し、主軸方向はＮ－14°－Ｗを示す。南西隅から西壁中央にかけて木根による撹乱を受けている。覆土中には焼土及び炭化物が含まれ、焼失家屋と判断される。床直上には炭化した丸太材や板が出土するが、炭化材の出土量はわずかで上屋構造を推測するには至らない。床面は平坦で主柱穴間から北壁にかけて硬化し、壁溝はほぼ全周する。主柱穴は４本で住居対角線上にほぼ均一に配される。炉は北壁寄りＰ１・４間上の中間に位置し掘り込みは非常に浅い。Ｐ２・３間のＰ５は出入り口施設と考えられる。貯蔵穴は南西隅にあり、平面は長方形を呈する。遺物の出土状態はＰ１及びＰ５周辺の床直上にややまとまって出土する傾向が見られる。SI03-２は粗製の器台である。炉付近から出土していることから、炉器台として使用された可能性がある。貯蔵穴からはSI03-５・６・８の遺物がまとまって出土している。

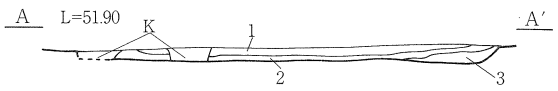
第５号住居跡は方形を呈し、主軸方向はＮ－14°－Ｗを示す。西壁から南西壁中央にかけて風倒木による撹乱を受けている。覆土中、特に壁際で焼土が多く含まれ、焼失家屋と判断されるが、炭化物はほとんど確認されていない。床面は平坦で住居内全体に良く硬化し、壁溝はほぼ全周する。主柱穴は確認されず、出入り口施設も確認されなかった。南隅で焼土が多量に含まれるＰ３を確認するが、貯蔵穴とするには規模の点で難があるため、性格は捉えられない。炉は西隅寄りに位置し、掘り込みは非常に浅いが火床部の残りが良好であった。遺物の出土状態は北東壁寄りにややまとまって出土している。その内の大部分がSI05-５の折り返し口縁壺の胴部片である。

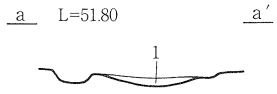
第７号住居跡は方形を呈し、主軸方向はＮ－５°－Ｅを示す。北西隅から西壁中央にかけてと床面の一部が木根による撹乱を受けている。また南西隅は未調査となっている。覆土中には焼土及び炭化物が含まれ、焼失家屋と判断される。床直上には焼土及び炭化した板材が出土するが、出土量は極僅かである。床面は平坦であるが、第３・５号住居跡と比べて全体に軟弱の感がある。被熱のためか、炭化材出土地点直下のＰ１周辺と南壁際の一部で硬化しているのが確認されており、本来は硬化面の範囲は全体に広がっていたものと推測される。壁溝はほぼ全周する。確認した主柱穴は３本であるが調査区外に１本遺存するものと考えられる。各柱穴は住居対角線上にほぼ均一に配される。炉は住居中央のＰ３寄りに位置し、掘り込みは非常にしっかりとしている。Ｐ４は南壁際中央やや西寄りにあり、出入り口施設と考えられる。貯蔵穴は確認されなかったが未調査部分の南西隅に遺存するものと考えられる。遺物の出土状態は、南側壁際でややまとまる傾向が見られるがさほど多くはない。SI07-３は粗製の器台で炉北側のＰ３付近で出土している。SI07-１・４・５は南壁際で出土したものである。

第13図　第３号住居跡出土遺物

SI05

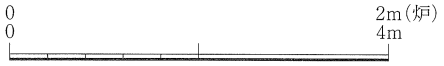


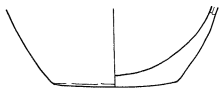




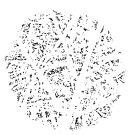
SI05 炉 1.明赤褐色 2.5YR5/8 火床部硬化顕著。下部ローム同様に硬化。

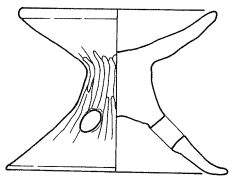
SI05 1.黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒少量。炭化粒微量。焼土粒微量。
2.黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒少量。ローム小ブロック少量。炭化物小ブロック少量。焼土粒微量。
3.極暗赤褐色土 5YR2/3 ローム粒少量。ローム小～中ブロック中量。炭化物小ブロック少量。焼土粒少量。焼土小ブロック少量。



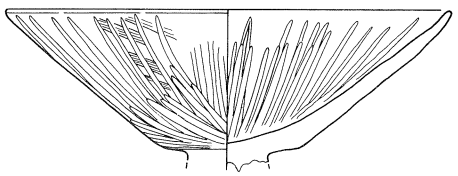


SI05-1

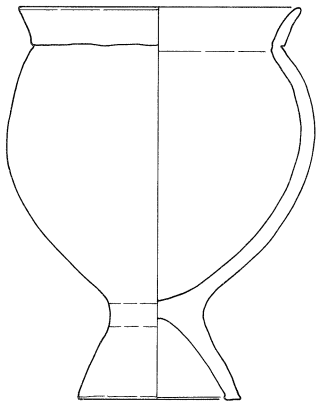




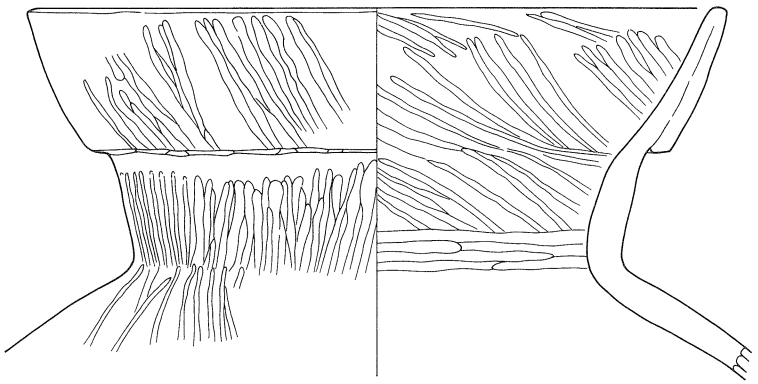
SI05-2



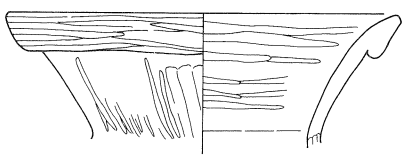
SI05-3



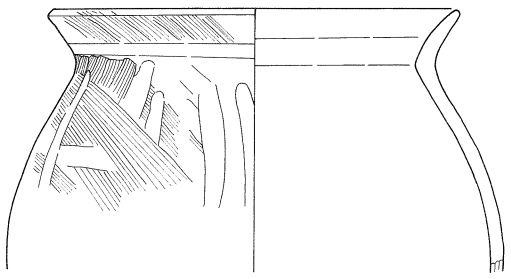
SI05-4



SI05-5



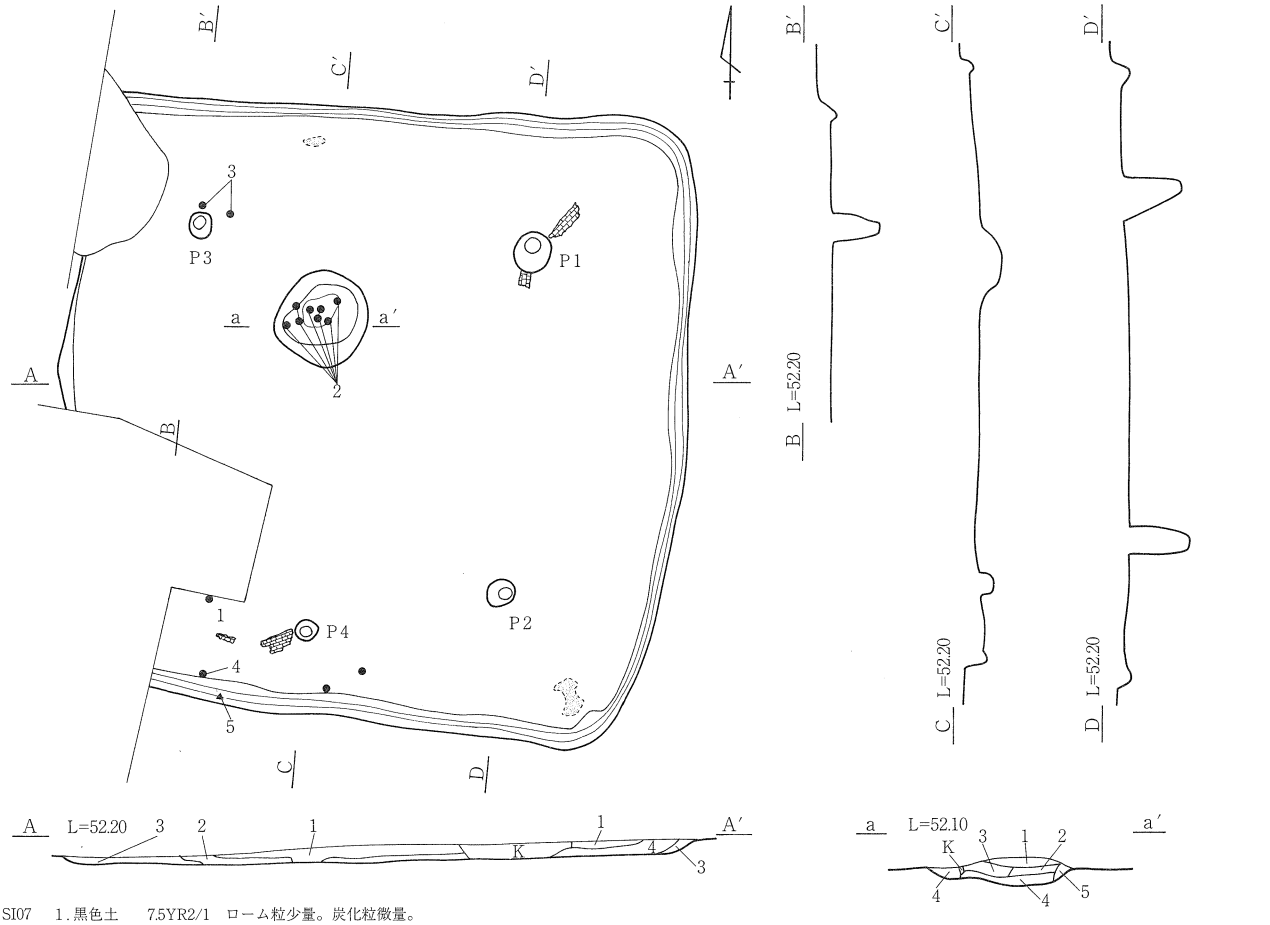
SI05-6



SI05-7

第 14 図　第 5 号住居跡及び出土遺物

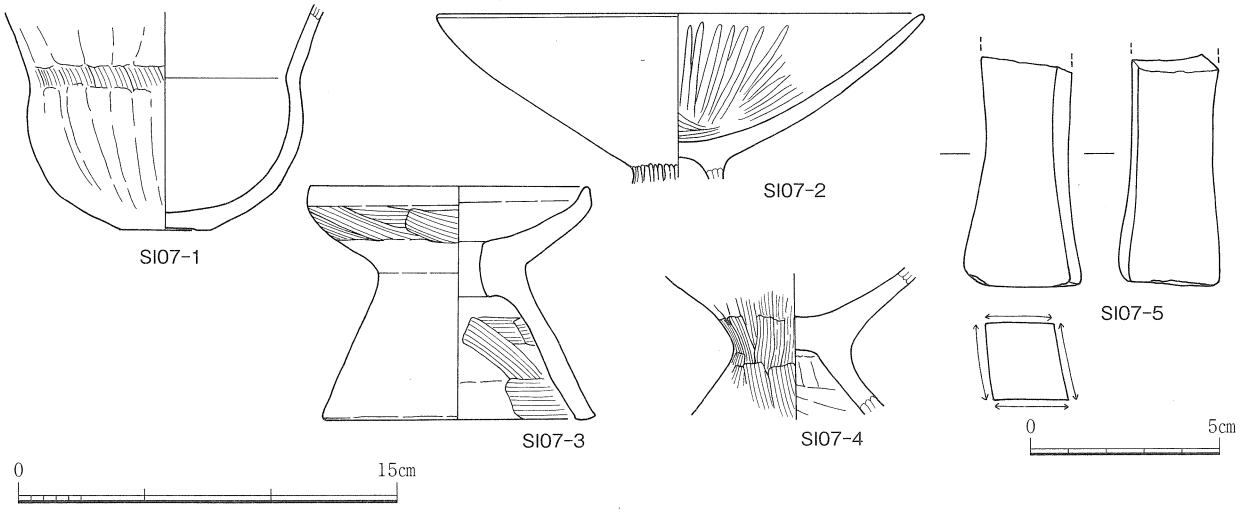
SI07



SI07　1.黒色土　7.5YR2/1　ローム粒少量。炭化粒微量。
2.黒褐色土　7.5YR2/2　ローム粒少量。ローム小ブロック微量。
3.暗褐色土　7.5YR3/3　ローム粒少量。ローム小～中ブロック少量。炭化物小ブロック微量。
焼土小ブロック微量。若干赤味帯びる。
4.黒褐色土　7.5YR3/2　ローム粒中量。ローム小ブロック少量。炭化粒少量。焼土粒微量。

SI07炉　1.黒色土　7.5YR2/1　ローム粒少量。焼土粒。焼土小～大B微量。住居床真上の覆土。
2.黒褐色土　7.5YR3/2　ローム粒少量。ローム小B微量。焼土小～中B少量。
3.暗褐色土　7.5YR2/2　ローム粒中量。焼土小B少量。
4.極暗赤褐　5YR2/4　ローム粒微量。ローム中B微量。焼土粒中粒。焼土小～中B少量。
5.黒褐色土　7.5YR3/1　ローム粒少量。焼土粒微量。

0　2m(炉)
0　4m



第15図　第7号住居跡及び出土遺物

第５表　古墳時代住居跡一覧表

遺構番号	位置グリッド	平面形	主軸方向	規模（m）			柱穴規模（径・深さ　cm）					火処	貯蔵穴	備考
				東西	南北	壁高	P1	P2	P3	P4	P5			
第３号住居跡	F5	方形	N-14°-W	5.38	5.83	0.17	31・32	33・37	37・48	33・48	25・8	炉	南西隅	
第５号住居跡	F3・4 G3・4	方形	N-14°-W	4.39	4.65	0.11	47・53	48・10	27・6	－	－	炉	なし	
第７号住居跡	A1・2 B1・2	方形	N-5°-E	6.44	(6.70)	0.13	42・61	33・65	29・60	26・15	96・22	炉	不明	南西隅部分未調査。

第６表　古墳時代住居跡出土遺物観察表

(cm)

遺物番号	器種	法量：①口径②底径③器高	胎土・色調・焼成・遺存度	特徴	備考
SI03－1	土師器・器台	① 10.4　② 7.6　③ 7.6	微砂粒、石英･灰褐色･良好･完形	外面磨き。脚部縦位ヘラ削り後磨き。	内外面は脚部内面を除き赤彩。
SI03－2	土師器・器台	① 10.9　② 11.8　③ 19.6	微砂粒、細礫・にぶい褐色・普通・完形	内外面ナデ。	
SI03－3	土師器・小型壷	① 13.2　② －　③ (4.7)	微砂粒・明赤褐色・良好・口縁～頸部	外面～内面口縁まで丁寧な磨き。	SI03-4と同一。
SI03－4	土師器・小型壷	① －　② －　③ (7.5)	微砂粒・明赤褐色・良好・胴部	外面丁寧な磨き。胴下部に径３㎜１孔。	SI03-3と同一。
SI03－5	土師器・壷	① －　② 7.0　③ 16.9	細砂粒、長石、石英・浅黄橙色・普通・１／２	外面刷毛目。	貯蔵穴内出土。
SI03－6	土師器・壷	① 20.0　② －　③ (9.1)	石英粒、チャート礫・にぶい橙色・良好・１／４、口縁～頸部	内外面磨き。複合口縁で外反	貯蔵穴内出土。
SI03－7	土師器・甕	① 17.0　② －　③ (10.9)	微砂粒・外面は煤による黒褐色、内面は灰褐色･普通・１／２	外面：刷毛目調整後、胴部はヘラ削り。口唇部外面に刻み目。	
SI03－8	土師器・壷	① (15.3)　② －　③ (6.3)	微砂粒・灰褐色・良好・口縁部片	折り返し複合口縁。外反。	貯蔵穴内出土。
SI05－1	土師器・小型鉢形土器	① －　② 4.7　③ －	微砂粒・にぶい橙色・良好・底部	外面ナデ。内面丁寧なナデ。底部木葉痕。	
SI05－2	土師器・器台	① 8.6　② 8.7　③ 6.4	微砂粒多量・にぶい橙色・良好・完形	受け部の外面ナデ、内面黒化。脚部外面磨き	
SI05－3	土師器・高坏	① (17.5)　② －　③ －	長石粒、石英粒･明赤褐色・やや良好・脚部欠損	坏部内外面縦位の磨き。凸接合。	
SI05－4	土師器・台付甕	① 11.1　② 6.3　③ 15.5	微砂粒・にぶい褐色・良好・ほぼ完形	外面ナデ、押さえ調整。内面ヘラナデ。	
SI05－5	土師器・壷	① 27.6　② －　③ (14.6)	長石粒、石英粒・にぶい橙色・良好・１／４口縁～頸部	内外面磨き。複合口縁で内湾気味に外傾	
SI05－6	土師器・壷	① (15.6)　② －　③ －	黄白色微粒･にぶい黄橙色・良好・口縁部片	外面口縁横位磨き。頸部縦位ヘラナデ後縦位磨き。内面横位磨き。複合口縁。	
SI05－7	土師器・甕	① (16.0)　② －　③ －	微砂粒・にぶい橙色・良好・口縁部片	外面刷毛目調整後、口縁横方向ヘラナデ、胴部縦方向ヘラナデ。	
SI07－1	土師器・坩	① －　② 3.6　③ (8.6)	微砂粒・にぶい橙色・良好・１／３	外面刷毛目調整後、縦位ヘラナデ。	
SI07－2	土師器・高坏	① (19.2)　② －　③ (6.7)	長石粒、石英粒。赤褐色・普通・坏部２／３	坏部外面ヘラナデ。内面磨き。	
SI07－3	土師器・器台	① 10.7　② 10.6　③ 9.3	微砂粒・にぶい橙色・普通・完形	外面ナデ、受け部刷毛目調整後ナデ。脚部内面刷毛目。	
SI07－4	土師器・器台	① －　② －　③ －	長石粒、石英粒・赤褐色・良好	内外面刷毛目	
SI07－5	砥石	長さ6.0・幅2.6・厚さ2.8	材質：流紋岩		中央部で折損。

3．古代住居跡（第16図～第21図）

古代の住居跡は１区で第１・２・４・６号住居跡の４軒が確認される。配置傾向は調査区の東側に集中して見られ、第１・２号住居跡と第４・６号住居跡がそれぞれ近接している。いずれも９世紀代後半から10世紀代前半の範疇に収まるものと考えられる。規模等、各住居跡の詳細については第７表に記した。

第１号住居跡は方形を呈し、カマド位置を中心とした主軸方向はＮ－39°－Ｅを示し、他の住居と比べて傾きが大きい。床面は平坦であるがカマド前面で若干締まりが強いほかは硬化する部分が見られず、木根等の撹乱を受けているためか全体に軟弱である。壁溝は北東壁側を除いて全周する。ピットは確認されなかった。カマドは北東壁東寄りにある。カマド袖部分の遺存は良くないが、両袖部分では片岩を用いて構築の補強にあてている。火床部の掘り込みは深く、前面にかけて炭化物の堆積が見られた。遺物の出土状態はカマド周辺にまとまる傾向にある。

第２号住居跡は東西に長い長方形を呈し、カマド位置を中心とした主軸方向はＮ－18°－Ｅを示す。北東隅から東壁にかけて第１号土坑と重複し、本跡が壊されている。床面は住居中央の南寄りで木根による撹乱を受けている。全体は平坦で、カマド前面と住居中央部分で若干締まりが強いほかは硬化する部分が見られず木根等の撹乱を受けているためか全体に軟弱である。壁溝はほぼ全周する。ピットは確認されなかった。カマドは北壁ほぼ中央にあり、カマドの中心が撹乱を受け、火床部にまで及んでいる。袖部分は正面右側の部分がかろうじて残存し、構築の補強にあてた土師器甕が確認されている。遺物の出土は僅かで、住居東側に寄って出土している。

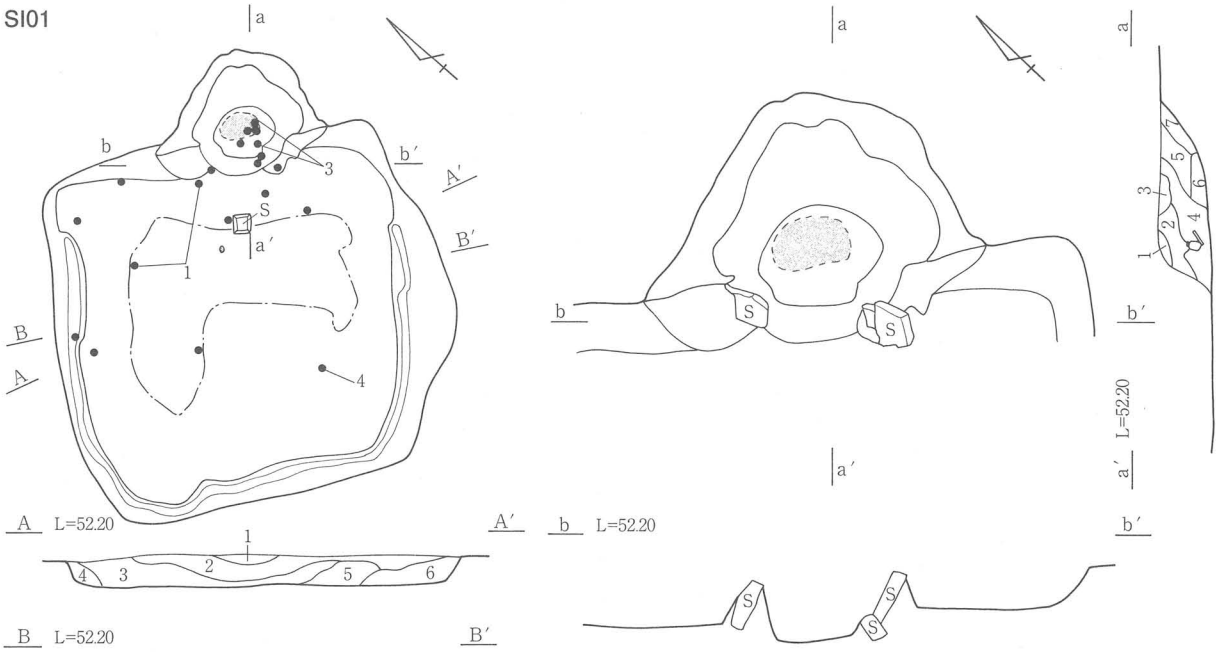
第４号住居跡は方形を呈し、カマド位置を中心とした主軸方向はＮ－13°－Ｅを示す。床面は平坦で全体に締まっているが、特に硬化した部分は見られない。壁溝はカマド前面を除き全周する。ピットはＰ１が南壁寄りの中央部やや東寄りで確認され、出入り口施設に伴うものと考えられる。カマドは北東寄りにあるコーナーカマドと捉えられる。カマド中央部分に支脚として使用したと考えられる石が立脚するが、被熱をさほど受けていないと見られる。遺物の出土は覆土中からのものが僅かにあるのみで、新旧遺物が混入する状態である。

第６号住居跡は方形を呈し、カマド位置を中心とした主軸方向はＮ－14°－Ｅを示す。床面は平坦で全体に締まっているが、特に硬化した部分は見られない。壁溝はカマド前面を除き全周する。ピットはＰ１が南壁寄りの中央部で確認され、出入り口施設に伴うものと考えられる。カマドは北壁中央と北東隅に２基確認されている。２基は新旧関係を伴うものと思われるが、北壁カマド前面に壁溝の痕跡が見られること以外は判断材料に乏しい。火床部は両カマドとも遺存が良好である。北壁カマドの正面左袖部分には、構築の補強にあてた土師器甕が確認されている。遺物の出土は、両カマド周辺の床直上に集中して見られる。一方、住居南側では覆土中から若干の細片が出土する程度である。南壁際やや西寄りの床面には、片岩の集中している部分が見られるが、その意図は不明である。

第７表　古代住居跡一覧表

遺構番号	位置グリッド	平面形	主軸方向	規模（m）			柱穴規模（径・深さ　cm）					火処	貯蔵穴	備考
				東西	南北	壁高	P1	P2	P3	P4	P5			
第１号住居跡	E5・F5	方形	N-39°-E	2.92	2.91	0.23	－	－	－	－	－	カマド	なし	
第２号住居跡	E5	長方形	N-18°-E	3.87	2.67	0.21	－	－	－	－	－	カマド	なし	第１号土坑と重複。本跡が古い。
第４号住居跡	G5・6	方形	N-13°-E	2.47	2.48	0.31	33・15	－	－	－	－	カマド	なし	
第６号住居跡	F5・G5	方形	N-14°-E	3.11	2.40	0.35	19・7	－	－	－	－	カマド	なし	カマド２基。作り替え。

SI01

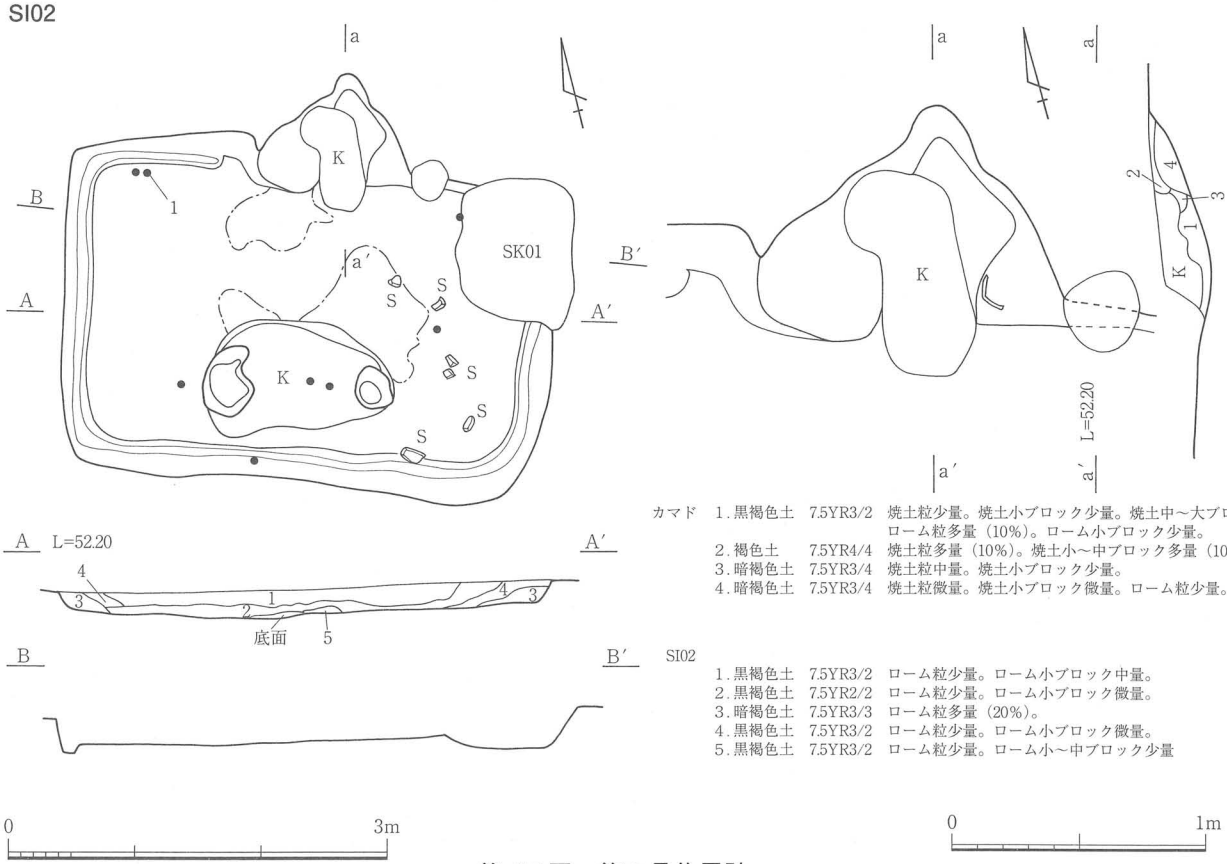


SI01
1.極暗褐色土 7.5YR2/3 ローム粒少量。
2.黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒少量。炭化粒微量。
3.暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒中量。ローム小～中ブロック少量。
4.黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒少量。ローム小～中ブロック少量。
5.暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒多量（10%）。ローム小ブロック少量。
6.暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒多量（10%）。ローム小ブロック中量。炭化粒微量。
7.黒褐色土 7.5YR3/1 ローム粒多量（15%）。ローム小ブロック中量。焼土小ブロック微量。

カマド
1.黒褐色土 7.5YR3/2 焼土粒少量。焼土小ブロック微量。ローム粒中量。
2.暗褐色土 7.5YR3/3 焼土粒少量。焼土小ブロック少量。ローム粒中量。ローム小ブロック少量。
3.暗赤褐色土 5YR3/2 焼土粒少量。焼土小ブロック少量。ローム粒多量（10%）。
4.極暗赤褐色土 5YR2/4 焼土粒少量。焼土小～中ブロック少量。ローム粒少量。
5.暗赤褐色土 5YR3/6 焼土粒中量。焼土小～中ブロック多量（15%）。
6.極暗赤褐色土 5YR2/3 焼土粒微量。焼土小ブロック微量。
7.暗赤褐色土 5YR3/2 焼土粒少量。焼土小ブロック少量。ローム小ブロック微量。

第16図　第1号住居跡

SI02

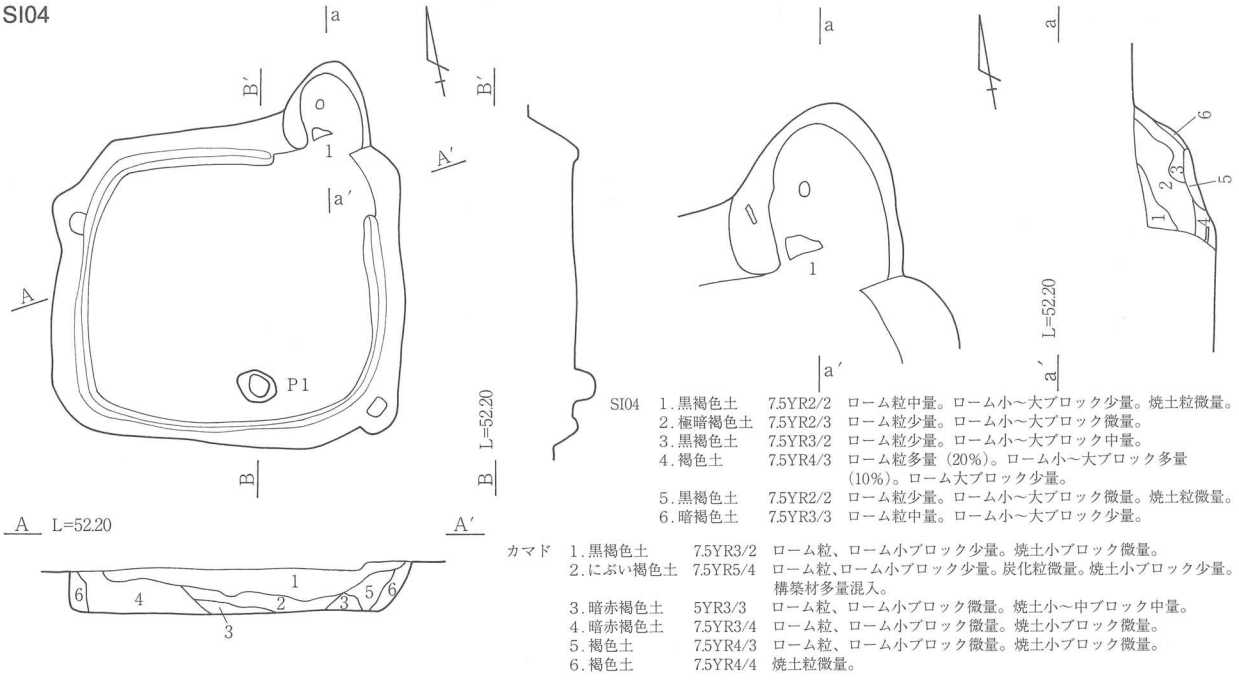


カマド
1.黒褐色土 7.5YR3/2 焼土粒少量。焼土小ブロック少量。焼土中～大ブロック微量。ローム粒多量（10%）。ローム小ブロック少量。
2.褐色土 7.5YR4/4 焼土粒多量（10%）。焼土小～中ブロック多量（10%）。
3.暗褐色土 7.5YR3/4 焼土粒中量。焼土小ブロック少量。
4.暗褐色土 7.5YR3/4 焼土粒微量。焼土小ブロック微量。ローム粒少量。

SI02
1.黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒少量。ローム小ブロック中量。
2.黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒少量。ローム小ブロック微量。
3.暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒多量（20%）。
4.黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒少量。ローム小ブロック微量。
5.黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒少量。ローム小～中ブロック少量

第17図　第2号住居跡

SI04

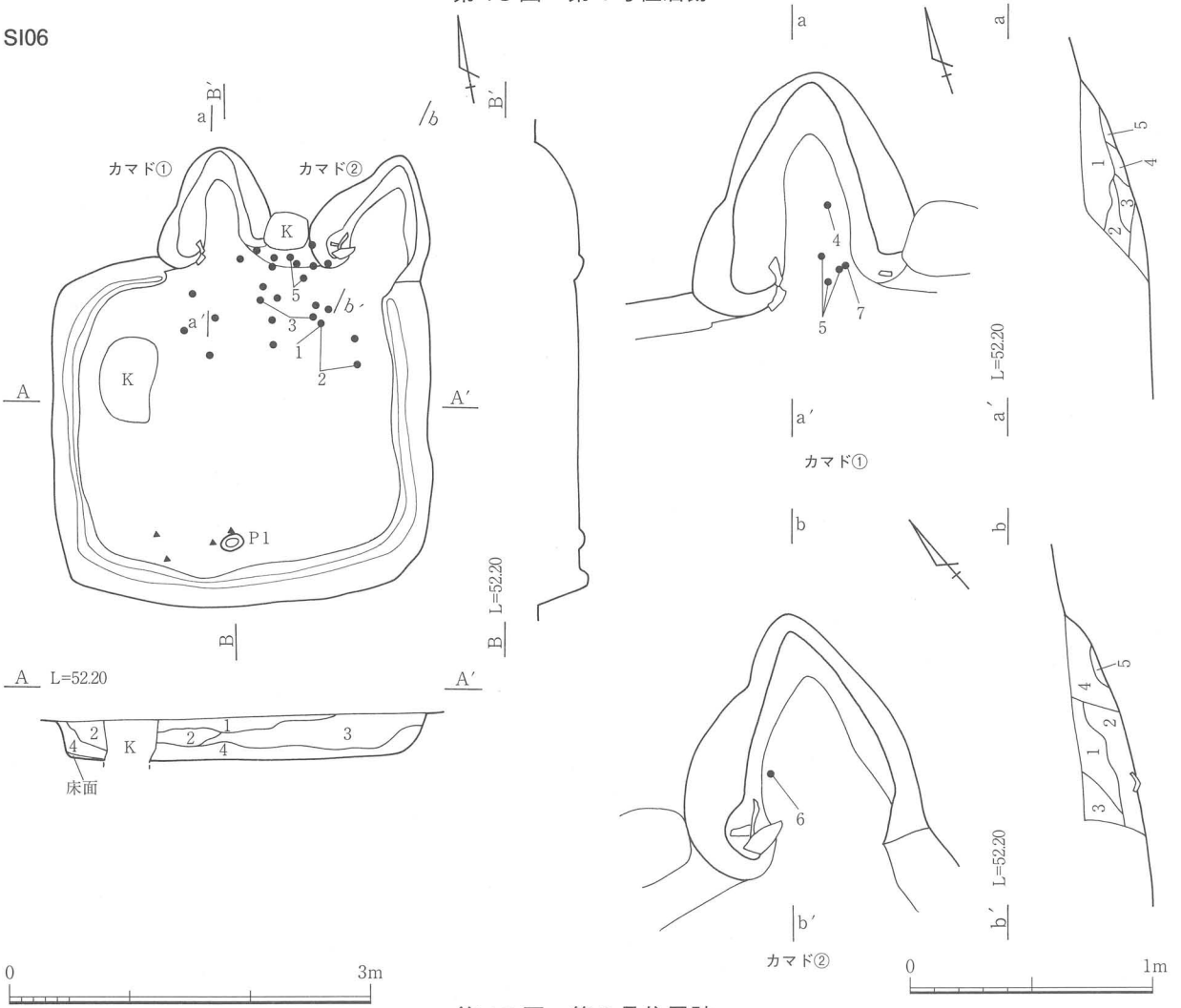


SI04
1. 黒褐色土　7.5YR2/2　ローム粒中量。ローム小～大ブロック少量。焼土粒微量。
2. 極暗褐色土　7.5YR2/3　ローム粒少量。ローム小～大ブロック微量。
3. 黒褐色土　7.5YR3/2　ローム粒少量。ローム小～大ブロック中量。
4. 褐色土　7.5YR4/3　ローム粒多量（20%）。ローム小～大ブロック多量（10%）。ローム大ブロック少量。
5. 黒褐色土　7.5YR2/2　ローム粒少量。ローム小～大ブロック微量。焼土粒微量。
6. 暗褐色土　7.5YR3/3　ローム粒中量。ローム小～大ブロック少量。

カマド
1. 黒褐色土　7.5YR3/2　ローム粒、ローム小ブロック少量。焼土小ブロック微量。
2. にぶい褐色土　7.5YR5/4　ローム粒、ローム小ブロック少量。炭化粒微量。焼土小ブロック少量。構築材多量混入。
3. 暗赤褐色土　5YR3/3　ローム粒、ローム小ブロック微量。焼土小～中ブロック中量。
4. 暗赤褐色土　7.5YR3/4　ローム粒、ローム小ブロック微量。焼土小ブロック微量。
5. 褐色土　7.5YR4/3　ローム粒、ローム小ブロック微量。焼土小ブロック微量。
6. 褐色土　7.5YR4/4　焼土粒微量。

第18図　第4号住居跡

SI06

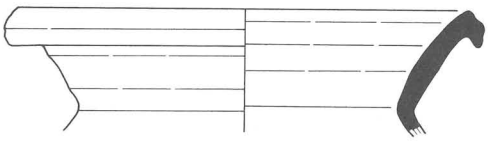


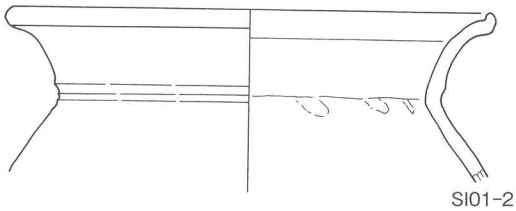
第19図　第6号住居跡

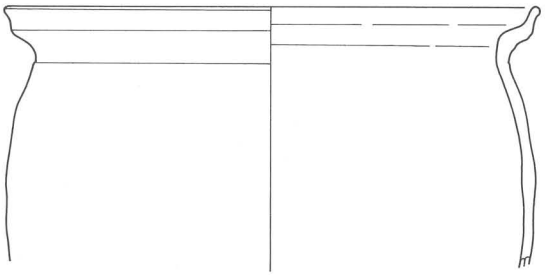
SI06　1　黒褐色土　7.5YR2/2　ローム粒少量。
2　黒褐色土　7.5YR3/2　ローム粒中量。ローム小ブロック少量。炭化粒微量。焼土粒微量。
3　暗褐色土　7.5YR3/3　ローム粒中量。ローム小ブロック中量。焼土粒微量。焼土小ブロック微量。
4　暗褐色土　7.5YR3/3　ローム粒少量。ローム小ブロック少量。
5　黒褐色土　7.5YR3/2　ローム粒少量。焼土粒少量。
6　暗褐色土　7.5YR3/4　基本堆積土層　層に相当
7　黒褐色土　7.5YR3/1　撹乱

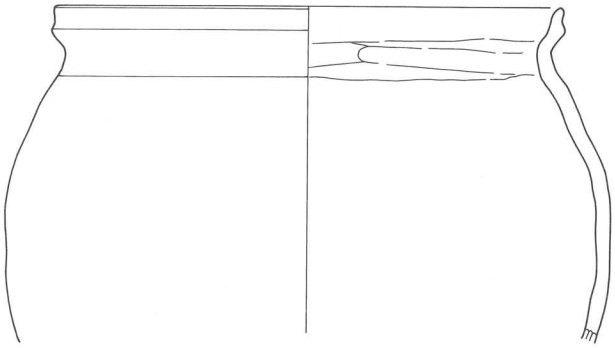
カマド①1　暗褐色土　7.5YR3/3　ローム粒多量(20%)。ローム小～中ブロック多量(5～10%)。焼土小～中ブロック少量。
2　暗赤褐色土　5YR3/3　ローム粒多量(10%)。ローム小ブロック多量(5%)。焼土小～中ブロック少量。
3　暗赤褐色土　5YR3/4　ローム粒多量（10%)。ローム小ブロック少量。焼土小～中ブロック中量。
4　暗褐色土　7.5YR3/4　ローム粒少量。ローム小ブロック少量。焼土粒少量。
5　褐色土　7.5YR4/3　焼土小ブロック微量。

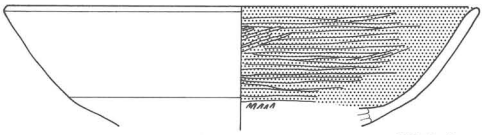
カマド②1　黒褐色土　7.5YR3/2　ローム粒少量。ローム小ブロック中量。
2　暗赤褐色土　5YR3/3　ローム粒少量。ローム小ブロック多量（10%)。焼土小～中ブロック多量（5%)。
3　暗褐色土　7.5YR3/3　ローム粒多量（10%)。ローム小ブロック中量。焼土小～中ブロック少量。
4　暗褐色土　7.5YR3/4　ローム粒多量（5%)。ローム小ブロック中量。焼土小～中ブロック中量。ローム大ブロック多量。
5　褐色土　7.5YR4/3　焼土小ブロック微量。

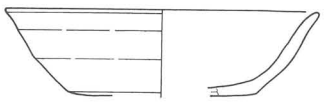

SI01-1

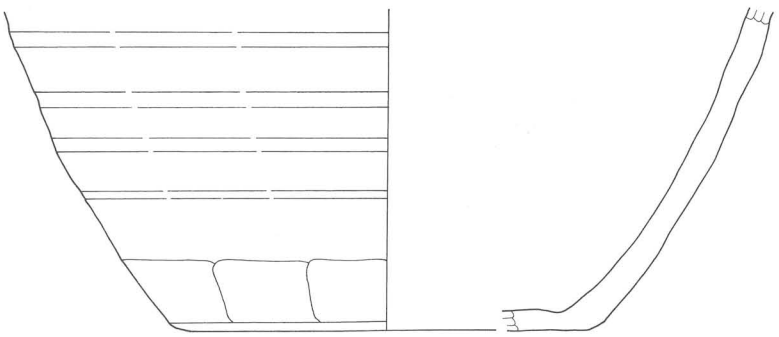

SI01-2(フク土)


SI01-3

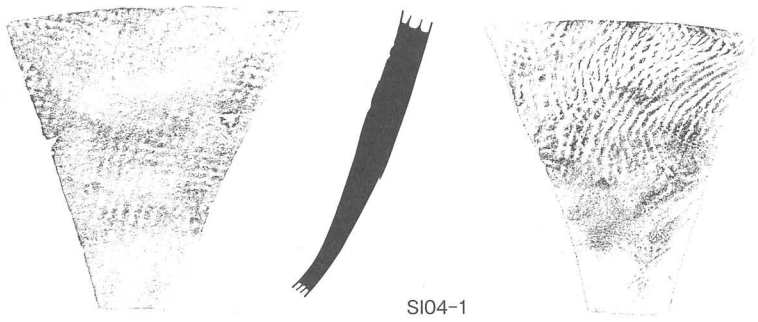

SI01-4


SI02-1

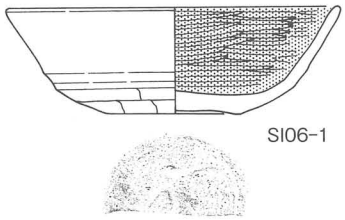

SI02-2
(カマド･フク土)


SI02-3(カマド･フク土)

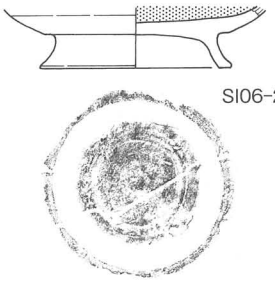
第20図　第1・2号住居跡出土遺物



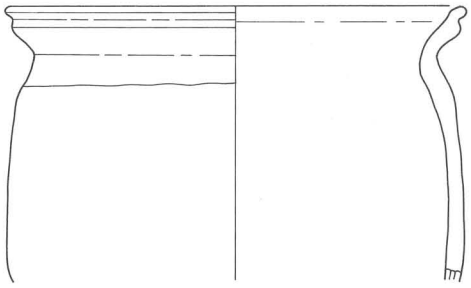
SI04-1



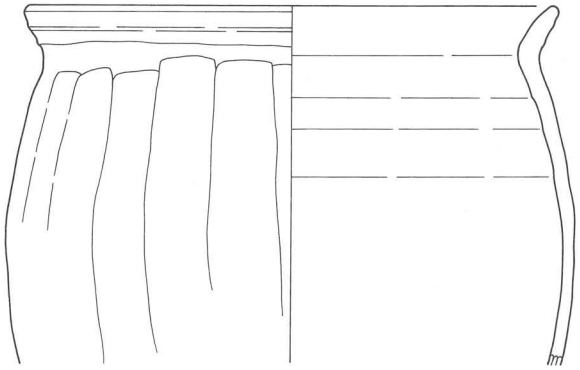
SI06-1



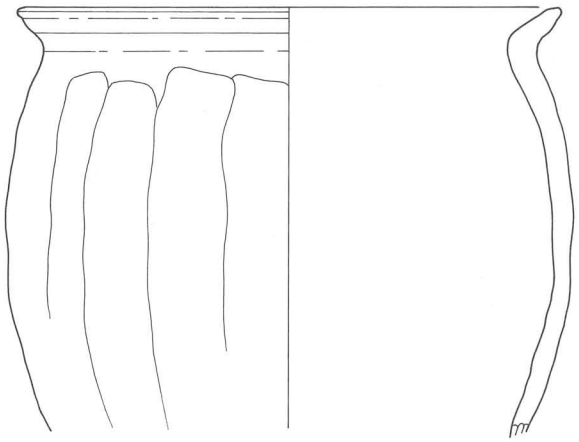
SI06-2



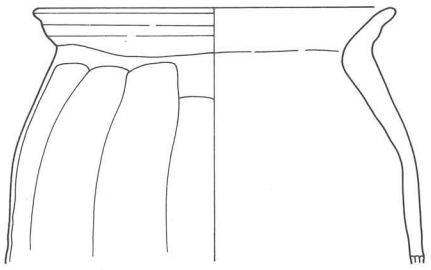
SI06-3



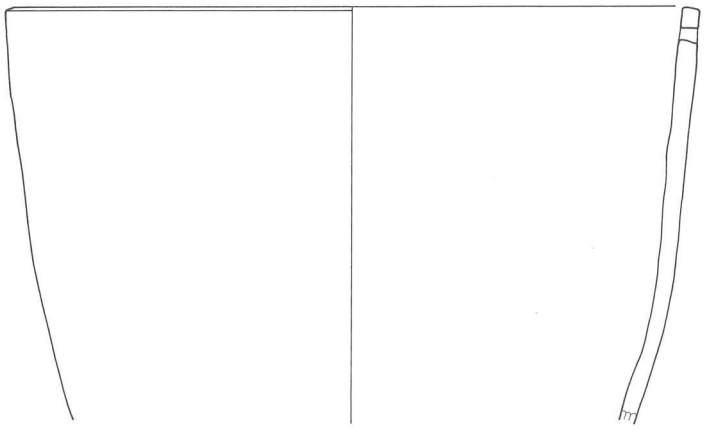
SI06-4



SI06-5



SI06-6



SI06-7

第 21 図　第 4・6 号住居跡出土遺物

第８表　古代住居跡出土遺物観察表

(cm)

遺物番号	器種	法量：①口径②底径③器高	胎土・色調・焼成・遺存度	特徴	備考
SI01－1	須恵器・甕	①（17.4）②－　③（5.0）	微砂粒、石英・灰色・良好・口縁部片		
SI01－2	土師器・甕	①（16.8）②－　③（6.7）	微砂粒、石英・褐色・良好・口縁部片	外面横位ヘラナデ。	
SI01－3	土師器・甕	①（20.8）②－　③（13.3）	微砂粒、石英、細礫・にぶい褐色・良好・口縁部片		カマド袖部出土。
SI01－4	土師器・甕	①（19.8）②－　③（13.3）	微砂粒、石英、細礫・にぶい褐色・良好・１／４口縁部片	外面ヘラナデ。内面頸部ヘラ削り。	
SI02－1	土師器・坏	①（17.6）②－　③（4.7）	チャート礫・にぶい黄橙色・良好１／４口縁部片	外面体部下端ヘラ削り。内面黒色処理・磨き	
SI02－2	土師器・坏	①（12.4）②（7.4）③（3.4）	石英主体微砂粒・にぶい褐色・良好・口縁部片		
SI02－3	土師器・甕	①－　②（16.8）③（12.6）	長石礫・にぶい褐色・普通	外面ヘラナデ。胴部下端ヘラ削り。	
SI04－1	須恵器・甕	①－　②－　③－	長石礫・暗青灰色・良好・胴部片	外面擬格子叩き。内面同心円あて具痕。	
SI06－1	土師器・坏	①（13.0）②　5.4　③　4.2	長石含む微砂粒・にぶい橙色・普通・１／３	外面体部下端ヘラ削り。内面黒色処理・磨き	
SI06－2	土師器・高台付埦	①－　②　7.6　③（2.1）	白色粒、スコリア粒・橙色・普通・底部片	内面黒色処理。	
SI06－3	土師器・甕	①（18.0）②－　③（20.8）	石英粒、チャート礫・明褐色・良好・１／４	外面ナデ。	
SI06－4	土師器・甕	①（20.8）②－　③（14.2）	石英粒、チャート礫・明黄褐色・良好・１／３	外面ヘラ削り。	カマド１袖部出土。
SI06－5	土師器・甕	①（21.0）②－　③（16.8）	長石粒、石英粒、チャート礫・赤褐色・良好・１／４	外面ヘラ削り。	
SI06－6	土師器・甕	①（14.0）②－　③（10.0）	微砂粒・にぶい褐色・良好・１／４	外面ヘラ削り。	カマド１内出土。
SI06－7	土師器・甑	①（30.0）②－　③（16.7）	石英・角閃石微量・にぶい黄橙色・良好		カマド２内出土。

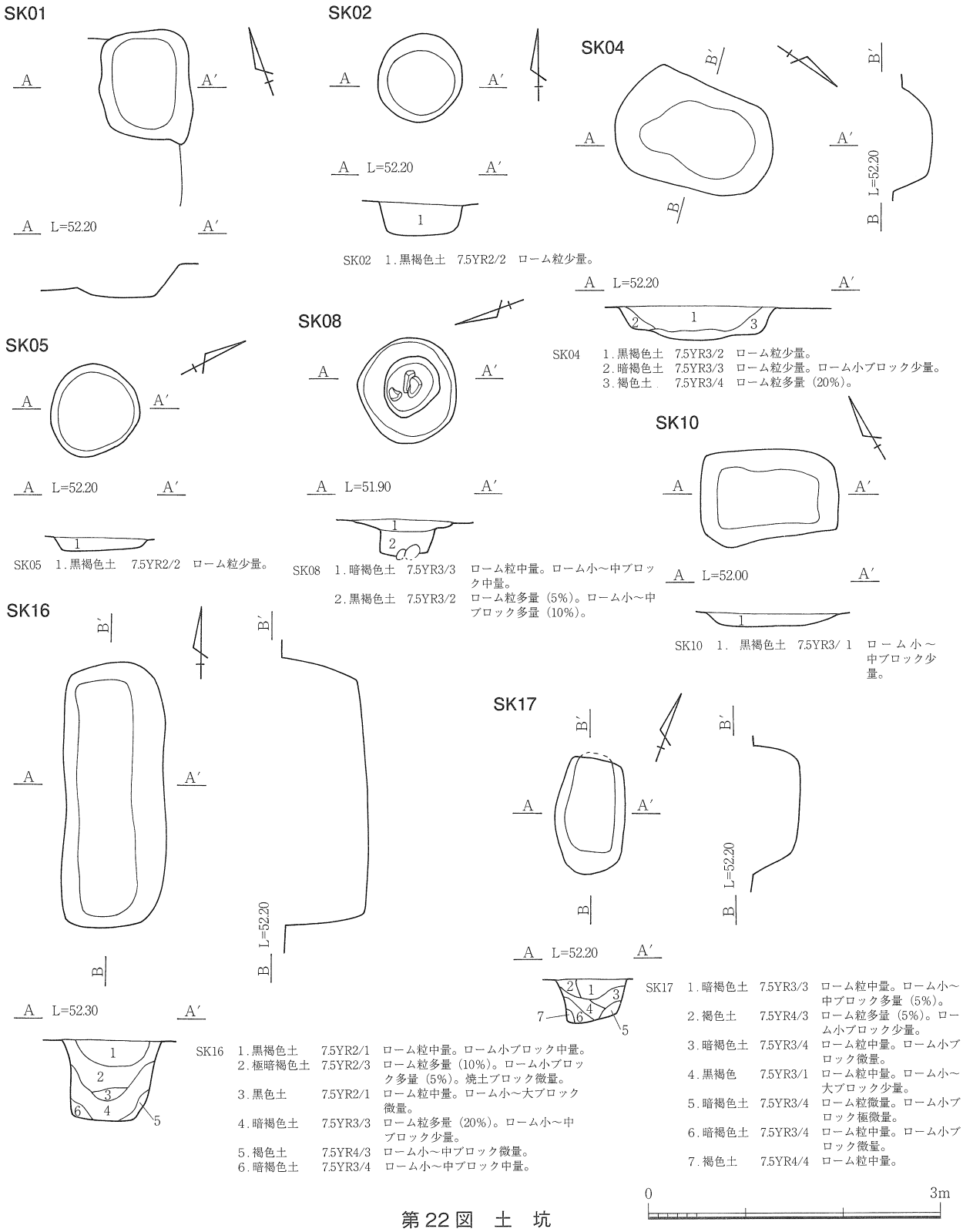
第９表　土坑一覧表

遺構番号	位置グリッド	平面形状	断面形状	主軸方向	規模（m）			備考
					長軸	短軸	深さ	
第１号土坑	E5	長方形	箱状	N-13°-E	1.11	0.93	0.09	第１号住居跡と重複。本跡が新しい。
第２号土坑	F5	円形	鍋底状	N-36°-E	0.95	0.93	0.17	
第３号土坑	G5	不整形	不整形	N-83°-W	2.16	1.53	0.24	木根跡の可能性。
第４号土坑	G5	不整楕円形	鍋底状	N-22°-W	1.66	1.13	0.29	
第５号土坑	F4・G4	円形	鍋底状	N-28°-W	0.97	0.93	0.12	第５号住居跡と重複。本跡が新しい。
第６号土坑	F4	不整形	不整形	N-37°-W	1.98	1.48	0.53	木根跡の可能性。
第７号土坑	F4	不整形	不整形	N-61°-E	2.58	1.50	0.44	木根跡の可能性。土師器片出土。
第８号土坑	F3	円形	筒状	N-61°-W	1.08	1.02	0.34	底面に礫出土。１層目皿状を呈した別遺構。重複の可能性。土師器片出土。
第９号土坑	F3	円形	皿状	N-2°-W	0.97	0.91	0.08	
第10号土坑	D4・E4	長方形	皿状	N-62°-W	1.40	0.99	0.15	刷毛目調整の土師器片出土。
第11号土坑	F4・G4	楕円形	皿状	N-24°-W	1.34	0.83	0.08	
第12号土坑	G4	楕円形	皿状	N-9°-W	1.44	1.08	0.12	
第13号土坑	E4	円形	皿状	N-77°-E	0.84	0.78	0.13	
第14号土坑	E3	楕円形	不整形	N-54°-W	1.43	1.12	0.23	木根跡の可能性
第15号土坑	F5	円形	筒状	N-4°-E	0.45	0.36	0.16	刷毛目調整の土師器片出土。
第16号土坑	B2	長方形	箱状	N-1°-W	2.70	1.07	0.81	レンズ状土層堆積。土師器片出土
第17号土坑	B2	長方形	箱状	N-22°-W	1.18	0.72	0.46	レンズ状土層堆積。土師器片出土
第18号土坑	F2	円形	U字状	N-64°-E	0.86	0.76	0.12	第２号墳周溝の一部である可能性。土師器片出土
第19号土坑	B3・C3	楕円形	U字状	N-60°-W	(0.86)	(0.85)	0.42	SD07と重複。本跡が古い。

4．土坑

土坑は１区14基、２区５基、合せて19基が確認されている。規模等詳細については第９表に記した。

形状は長方形状を呈するものと円形状を呈するものに二分される。不整形又は楕円形のものは木根跡の入り込みが著しいもので本来の形状が不明瞭であった。



SK02　1．黒褐色土　7.5YR2/2　ローム粒少量。

SK04　1．黒褐色土　7.5YR3/2　ローム粒少量。
2．暗褐色土　7.5YR3/3　ローム粒少量。ローム小ブロック少量。
3．褐色土　7.5YR3/4　ローム粒多量（20%）。

SK05　1．黒褐色土　7.5YR2/2　ローム粒少量。

SK08　1．暗褐色土　7.5YR3/3　ローム粒中量。ローム小～中ブロック中量。
2．黒褐色土　7.5YR3/2　ローム粒多量（5%）。ローム小～中ブロック多量（10%）。

SK10　1．黒褐色土　7.5YR3/1　ローム小～中ブロック少量。

SK16　1．黒褐色土　7.5YR2/1　ローム粒中量。ローム小ブロック中量。
2．極暗褐色土　7.5YR2/3　ローム粒多量（10%）。ローム小ブロック多量（5%）。焼土ブロック微量。
3．黒色土　7.5YR2/1　ローム粒中量。ローム小～大ブロック微量。
4．暗褐色土　7.5YR3/3　ローム粒多量（20%）。ローム小～中ブロック少量。
5．褐色土　7.5YR4/3　ローム小～中ブロック微量。
6．暗褐色土　7.5YR3/4　ローム小～中ブロック中量。

SK17　1．暗褐色土　7.5YR3/3　ローム粒中量。ローム小～中ブロック多量（5%）。
2．褐色土　7.5YR4/3　ローム粒多量（5%）。ローム小ブロック少量。
3．暗褐色土　7.5YR3/4　ローム粒中量。ローム小ブロック微量。
4．黒褐色　7.5YR3/1　ローム粒中量。ローム小～大ブロック少量。
5．暗褐色土　7.5YR3/4　ローム粒微量。ローム小ブロック極微量。
6．暗褐色土　7.5YR3/4　ローム粒中量。ローム小ブロック微量。
7．褐色土　7.5YR4/4　ローム粒中量。

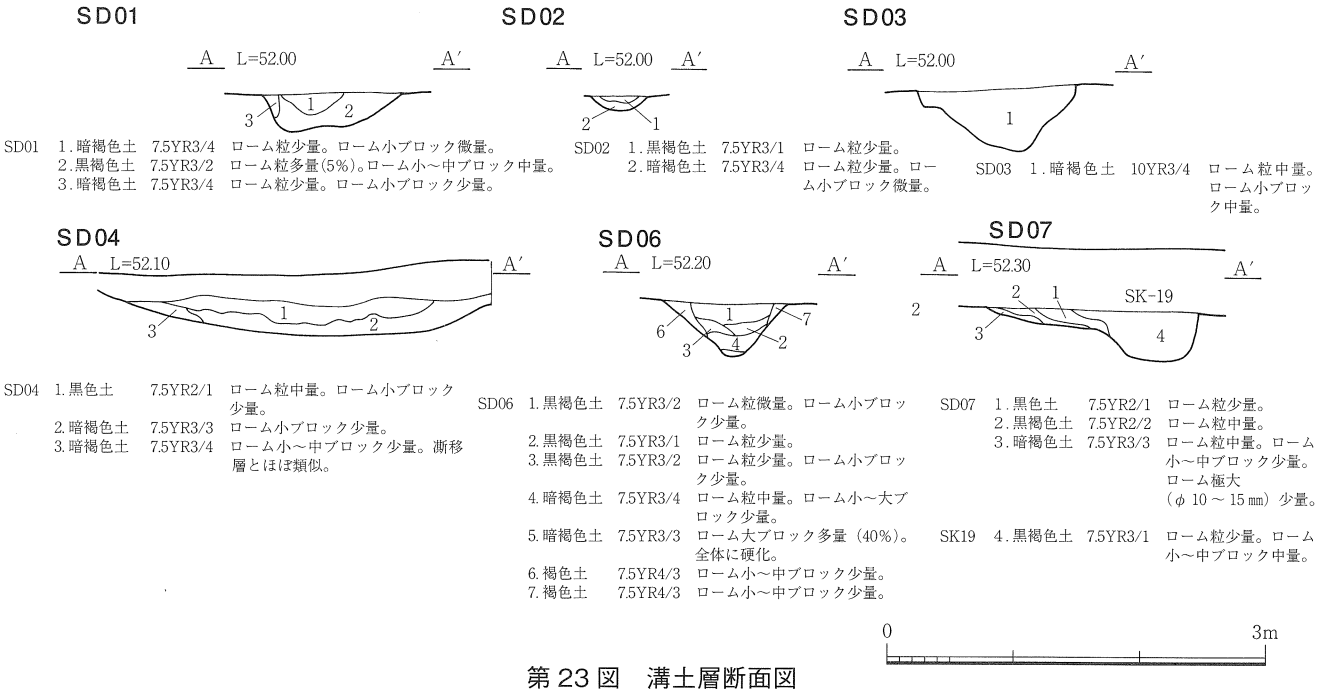
0　3m

第22図　土　坑

5．溝

溝は、１区４条、２区３条、合せて７条を確認する。詳細については第10表に記した。

第１号溝と第５号溝は配置関係から連続するものと考えられたが、第１号溝はカマボコ型、第５号溝は轍状に断面形状の違いから別遺構と判断される。第２号溝は箱状で浅く、途中で消滅してしまう。第３号溝は１区調査区南側の撹乱地点を境にして走行するもので、途中から消滅してしまう。断面の形状も不整形である。第４号溝は１区南東側で湾曲して確認され、今回調査の中では最も幅が広い。第６号溝は２区調査区の中央やや北寄りを走行し東西の調査区外へ伸びる。断面形状はＶ字を呈するが、底面は３～６cmまで硬化した層が全体に見られ、道として機能した可能性もある。第７号溝は２区の北東端部で一部が確認され、湾曲した状況を呈する。出土遺物は、１号溝の上面から「寛永通宝」の古銭が表面採取された。第６号溝からは古墳時代前期から古代にかけての遺物が覆土上面から混在して採取され、須恵器片数点も見られる。



SD01 1.暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒少量。ローム小ブロック微量。
2.黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒多量(5%)。ローム小～中ブロック中量。
3.暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒少量。ローム小ブロック少量。

SD02 1.黒褐色土 7.5YR3/1 ローム粒少量。
2.暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒少量。ローム小ブロック微量。

SD03 1.暗褐色土 10YR3/4 ローム粒中量。ローム小ブロック中量。

SD04 1.黒色土 7.5YR2/1 ローム粒中量。ローム小ブロック少量。
2.暗褐色土 7.5YR3/3 ローム小ブロック少量。
3.暗褐色土 7.5YR3/4 ローム小～中ブロック少量。漸移層とほぼ類似。

SD06 1.黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒微量。ローム小ブロック少量。
2.黒褐色土 7.5YR3/1 ローム粒少量。
3.黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒少量。ローム小ブロック少量。
4.暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒中量。ローム小～大ブロック少量。
5.暗褐色土 7.5YR3/3 ローム大ブロック多量（40%）。全体に硬化。
6.褐色土 7.5YR4/3 ローム小～中ブロック少量。
7.褐色土 7.5YR4/3 ローム小～中ブロック少量。

SD07 1.黒色土 7.5YR2/1 ローム粒少量。
2.黒褐色土 7.5YR2/2 ローム粒中量。
3.暗褐色土 7.5YR3/3 ローム粒中量。ローム小～中ブロック少量。ローム極大（φ10～15㎜）少量。

SK19 4.黒褐色土 7.5YR3/1 ローム粒少量。ローム小～中ブロック中量。

第23図　溝土層断面図

第10表　溝一覧表

遺構番号	位置 グリッド	断面 形状	走行方向	規模（m）			備考
				幅	長さ	深さ	
第１号溝	E3～5	箱状	N-70°-W	0.89～1.37	(13.90)	0.11～0.29	覆土上面で土師器片、古銭出土。
第２号溝	F3	箱状	N-23°-E	0.58～0.75	(2.87)	0.11～0.24	
第３号溝	G4・5, H5	U字状	N-54°-W	0.77～1.22	(15.98)	0.06～0.36	底面が不整形。土師器片出土。
第４号溝	G4～6, H4	U字状	N-54°-E	1.10～3.55	(18.00)	0.19～0.35	１区南東隅を湾曲して走行する。古墳周溝の可能性あり。土師器片出土。
第５号溝	E1・2	轍状	N-85°-W	0.95～1.36	(10.00)	0.12～0.15	２号墳周溝と重複。本跡が新しい。道跡の可能性あり。土師器片出土。
第６号溝	C1～3	V字状	N-87°-W	0.95～1.15	(14.35)	0.34～0.44	底面が硬化する。覆土上面で土師器片・須恵器片出土。
第７号溝	B2・3	U字状	N-25°-W	0.83～1.53	(3.30)	0.14～0.38	２区北東側にかかり、湾曲を呈する可能性。

Ⅵ. まとめ

今回の発掘調査にあたって事前に行った試掘調査では、トレンチ内で確認した住居跡８軒を主体とした集落跡とした。本調査を行った結果、竪穴住居跡７軒（古墳時代前期住居跡３軒・古代住居跡４軒）を検出したほか古墳２基を新たに検出し、集落跡とともに本遺跡が古墳群としての性格を有した遺跡であることが判明した。今回検出された古墳２基は、１・２両調査区にそれぞれ位置し、調査区の東西両端に寄って検出された。２区北端から約50m北側の真岡鉄道線境界に接した地点に遺存する墳丘と合わせて、板堂遺跡一帯が古墳群としての機能をもった遺跡であると確認された。

古墳について

調査を行った古墳は２基とも墳丘が失われ、周溝及び主体部の確認のみとなった。調査した２基の古墳を比較してみると、周溝から見た古墳の規模は第１号墳よりも第２号墳のほうが大きいが、さほど差がないことから同クラスの者を埋葬したものと考えられる。主体部は両古墳とも川原石小口積みの横穴式石室であったと考えられる。石室は長方形・箱形の掘り方内に小口積みした石の裏込めとして灰白色粘土主体の土が用いている点や、規模、床下から石積みの基底部となる掘り込みが施されている点は共通するが、内部では、床面が第１号墳は扁平な石を用いて構築しているのに対し、第２号墳は玉砂利的な小礫を、小さめのものは下部、大きめのものは上部と２層に分けて構築している点、出土遺物が、第１号墳では刀子２点が出土した以外は玉類がまったく出土しなかったのに対し、第２号墳では玉類、耳環といたった装身具類のみの出土であったことなどの差異が見られた。また第１号墳では、石室北側の床上に川原石を高く積み上げて石枕の機能を有した部分が見られるが、第２号墳では石室北西側が風倒木痕による撹乱で失われているため同様のものは確認されなかった。

第２号墳出土の玉類について見てみると、出土した玉類は32点で、管玉、棗玉、臼玉、小玉、丸玉がそれぞれ出土している。その内最も多いのはビーズ状のガラス製小玉で21点を数える。色調は青を基調とするが、これらは青緑色系と群青系に分類され、さらに青緑色系の中には不透明なものが含まれていた。群青系は基本的に透明であるが、やや透明度に欠ける。丸玉は土製で２点出土している。その内１点は表面に漆による塗装がなされ、もう１点も形状が類似することから同様の処理がなされていたものと思われる。臼玉は滑石製で１点出土している。丁寧に磨かれて光沢をもち、一連の玉類と同様、装身具として用いられたものと捉えることができる。

住居跡について

本調査区で検出された住居跡は古墳時代住居跡３軒、古代住居跡４軒である。

古墳時代の住居跡は全て炉を伴う住居跡で、台地南側縁辺部に近い１区から２軒、西側縁辺部に近い２区北端で１軒が検出されている。規模は第５号住居跡が最も小さく、第７号住居跡は１辺が6.7m前後と比較的大型である。第７号住居跡では貯蔵穴は確認されなかったが、第３号住居跡の配置とほぼ一致することから調査区外に貯蔵穴があるものと推測される。出土遺物をみると、第３号住居跡から出土した粗製器台は脚部の内面を除き赤彩が施されている。第７号住居跡からもほぼ同型のものが出土しているが、こちらは口唇部を摘み上げているのが特徴である。複合口縁壺は第３号住居跡で２点出土し、１点は丁寧な磨きが施された小型壺で、口縁が外側に開き胴下部に穿孔を有している。もう１点は貯蔵穴内から出土した複合部幅の広いもので口縁が外反している。第５号住居跡から出土した複合口縁壺も複合部幅が広いものであるが、こちらは口縁がやや内湾し、非常に大型である。また第３号住居跡からは胴部下膨れの壺が貯蔵穴内から出土し

ている。高坏は、坏部下部に稜を有するものが第５号住居跡から出土している。脚部は欠損するが、接合部が小さく柱状を呈したものと推測される。逆に第７号住居跡から出土した高坏は稜を有さず、脚部もやや開き気味になると思われる。器台は第３号、第５号の各住居跡で小型のものが出土しているが、第３号住居跡の器台（SI03-１）は、第５号住居跡の器台（SI05-２）と比して受け部が大きく、脚部も開きが抑えられていることから、小型高坏の様相を呈している。甕は、小型台付甕、単口縁甕が第5号住居跡から出土している。第３号住居跡からは在地的な様相を呈した口唇部外面に刻み目を持つ甕が出土している。鉢形土器は第５号住居跡から底部に木葉痕を有する小型鉢形土器（SI05-1）が出土し、第７号住居跡からは頸部に括れをもつ中型サイズの坩（SI07-1）が見られる。これら遺構の形態及び出土遺物から、第３号、第７号住居跡は４世紀前半に位置づけられ、第５号住居跡が後続する４世紀後半の住居跡と考えられる。

古代の住居跡は全て１区東側から検出されている。各住居跡は１辺が2.4～3.0m以内とほぼ同規模の小型で方形を呈しているが、第２号住居跡のみが東西に長い長方形を呈している。全て住居の北西隅にカマドを有しているが、第２号住居跡は長方形という形態からか、やや中央に寄って検出されている。出土遺物は、いずれの住居も出土量が少なく限られた資料での考察となった。坏及び甕の形態を主体に見ていくと、第１号住居跡では、口唇部を摘み上げた甕が見られ、一部カマドの袖部に利用されているものも出土している。カマド付近で出土した須恵器甕は、口縁部を下方に折り返したもので益子窯所産と考えられる。第２号住居跡では、やや大き目の内面黒色処理された坏が見られる。第６号住居跡では、内面黒色処理の坏、高台付埦が出土しているほか、甕は開いた口縁部に口唇部の摘み上げが消滅し、外面がヘラによる縦削り調整を施しているものが主体となっている。これら遺構の形態及び出土遺物から、第１号、第２号住居跡が９世紀中葉から後葉にかけて、第６号住居跡は９世紀後半から10世紀前葉にかけての住居跡と考えられる。

尚、第４号住居跡は図示し得た遺物が須恵器胴部片の１点のみであり、時期決定できるものは出土しなかったが、遺構形態から推測すれば、第６号住居跡に近いともと考えられる。

溝について

１・２調査区で合わせて７条の溝が検出された。第１・３・５・６号の各溝は、東西に走行するものであるが、第４号溝及び第７号溝は湾曲を呈し、断面は船底状でレンズ状の堆積層を呈することから、古墳の周溝の可能性がある。第７号溝については２区の北東端部にほんの一部が確認されているに過ぎない。一旦分離しているものの両端の土層状況から一連の遺構と判断され、断面及び土層堆積状況が第１・２号墳の周溝と類似することから、第４号溝同様、古墳の周溝の可能性が考えられる。分離しているのはブリッジ部分にあたるためとも考えられる。

参考文献

真岡市史編さん委員会	1984『真岡市史』	真岡市
青木健二ほか	1989『上原古墳群』	日本窯業史研究所
三輪孝幸ほか	2000『坂上北原遺跡』	日本窯業史研究所
福田定信ほか	1988『飯塚古墳群発掘調査概報』	小山市教育委員会
瀬谷昌良ほか	1986『小栗地内遺跡群発掘調査報告書』	協和町小栗地内遺跡調査会
古代生産史研究会	1997『東国の須恵器』関東地方における歴史時代須恵器の系譜	古代生産史研究会
奈良・平安時代研究班	1991「8世紀末～9世紀前半の器種構成について」『研究ノート創刊号』	(財)茨城県教育財団
奈良・平安時代研究班	1992「9世紀後半の器種構成について」『研究ノート第２号』	(財)茨城県教育財団
奈良・平安時代研究班	1993「10世紀後半の器種構成について」『研究ノート第３号』	(財)茨城県教育財団
橋本博文	1981「梶山古墳出土玉類をめぐって」『常陸梶山古墳』	大洋村教育委員会
篠原祐一	1995「臼玉試論」『研究紀要第３号』	(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
中村享史・内山俊之	2005「下毛野の古墳埋葬施設」『月刊考古学ジャーナルNo.535』	ニューサイエンス社
鈴木容子	1977「請西の古墳出土の玉類について」『請西』	木更津市請西遺跡調査会

1．1区全景（北東から）

2．2区全景（北から）

PL 2

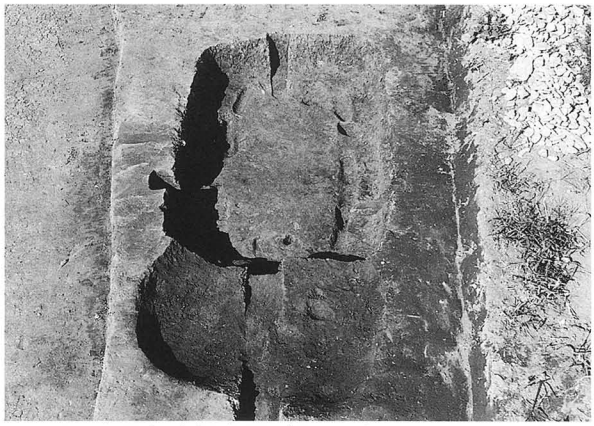
1. 第1号墳全景（南から）

2. 同　主体部確認状況（北から）

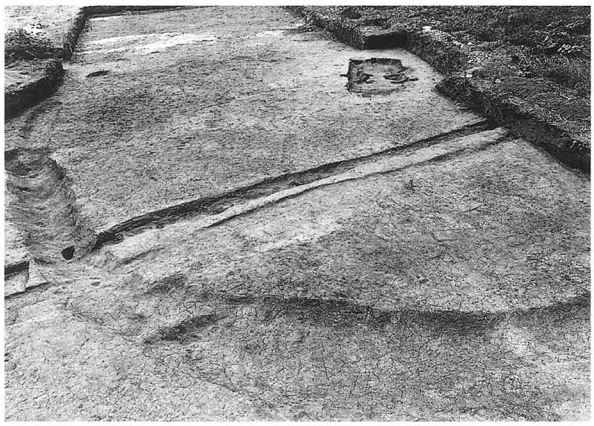
3. 同　主体部全景（西から）

4. 同　主体部全景（南から）

5. 同　主体部側壁断面



6. 同　主体部完掘全景（南から）



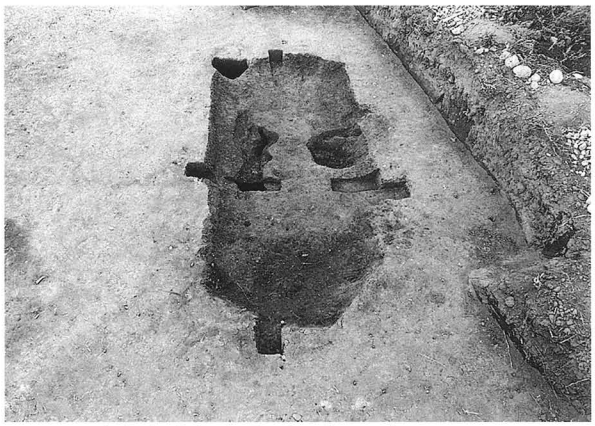
7. 第2号墳全景（北東から）

8. 同　主体部確認状況（北東から）

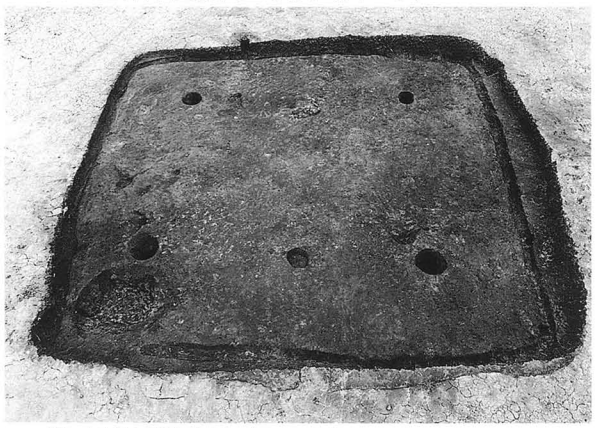
1. 第2号墳主体部全景（北東から）

2. 同　主体部遺物出土状況（南東から）

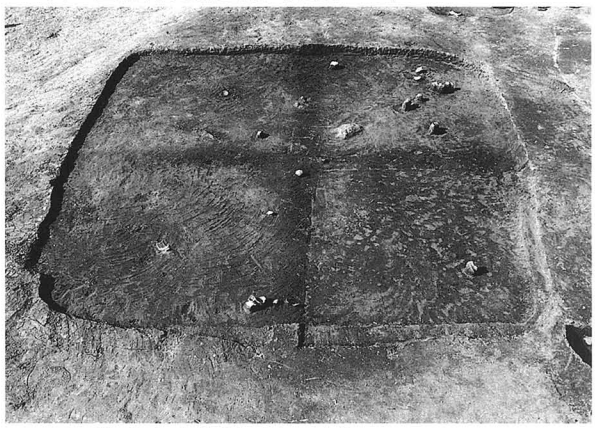
3. 同　主体部遺物出土状況（西から）



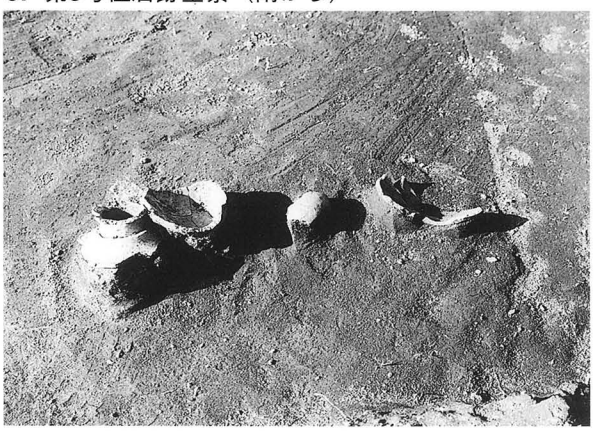
4. 同　主体部完掘全景（北東から）



5. 第3号住居跡全景（南から）



6. 同　遺物出土状況（南から）

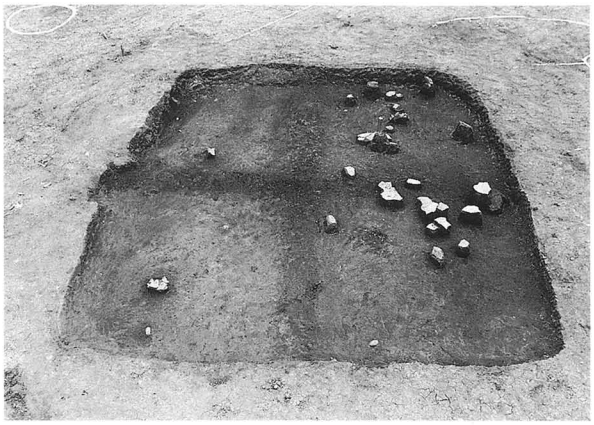


7. 同　遺物出土状況（南から）

8. 同　貯蔵穴内遺物出土状況（西から）

PL 4

1. 第5号住居跡全景（南から）



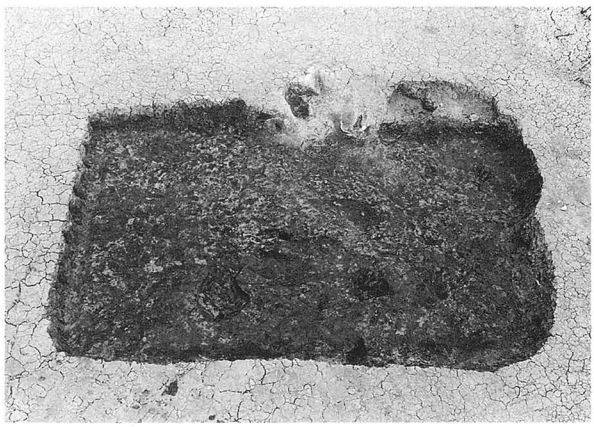
2. 同　遺物出土状況（南から）

3. 同　遺物出土状況（南東から）

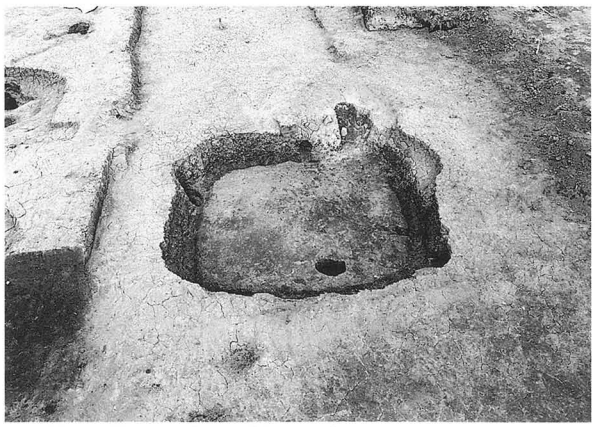
4. 第7号住居跡全景（南西から）

5. 第１号住居跡全景（南西から）

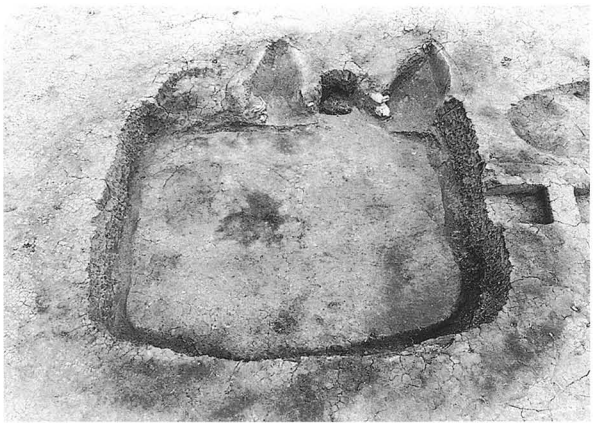
6. 同　カマド近景（南西から）



7. 第２号住居跡全景（南から）



8. 第4号住居跡全景（南から）

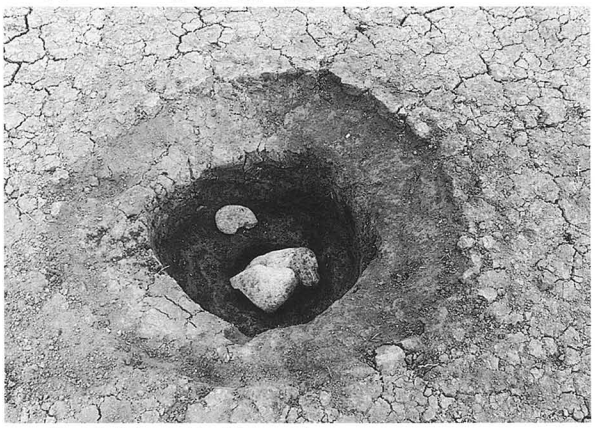


1. 第6号住居跡全景（南から）

2. 同　遺物出土状況（南から）

3. 同　カマド①　近景（南から）

4. 同　カマド②　近景（南西から）



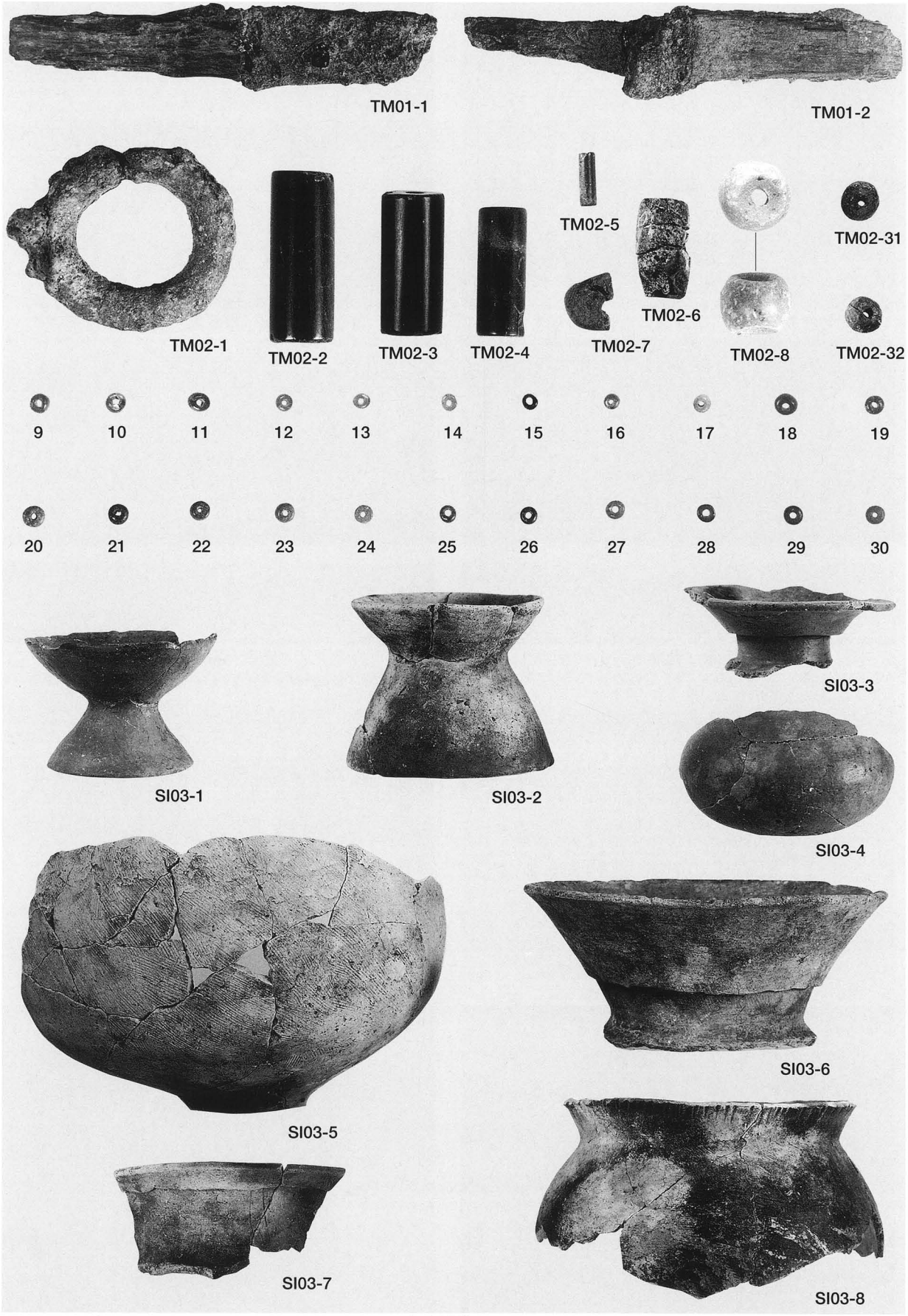
5. 第8号土坑全景（西から）

6. 第16・17号土坑全景（南から）

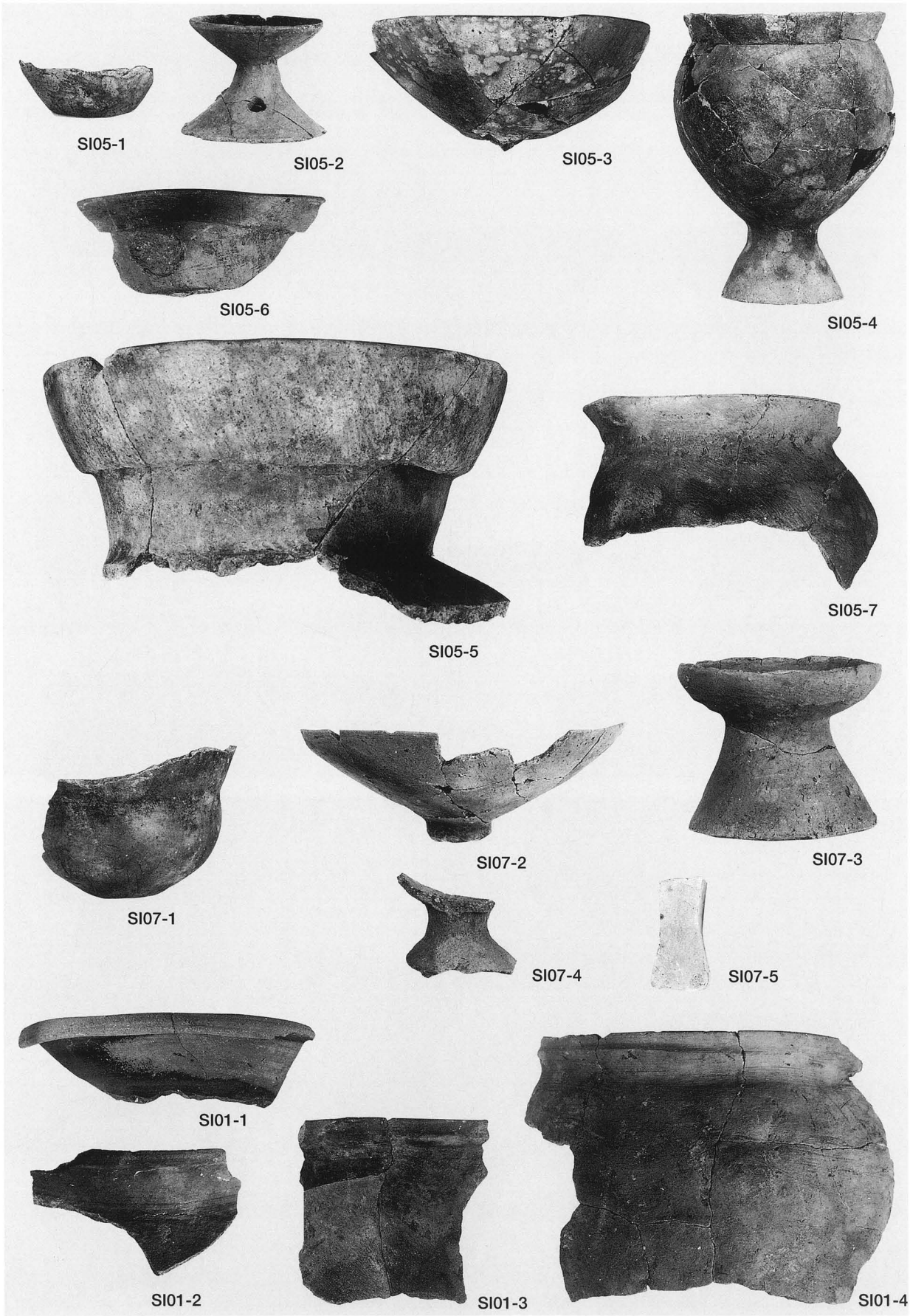
7. 第3・4号溝全景（西から）

8. 第7号溝、第19号土坑全景（西から）

PL 6

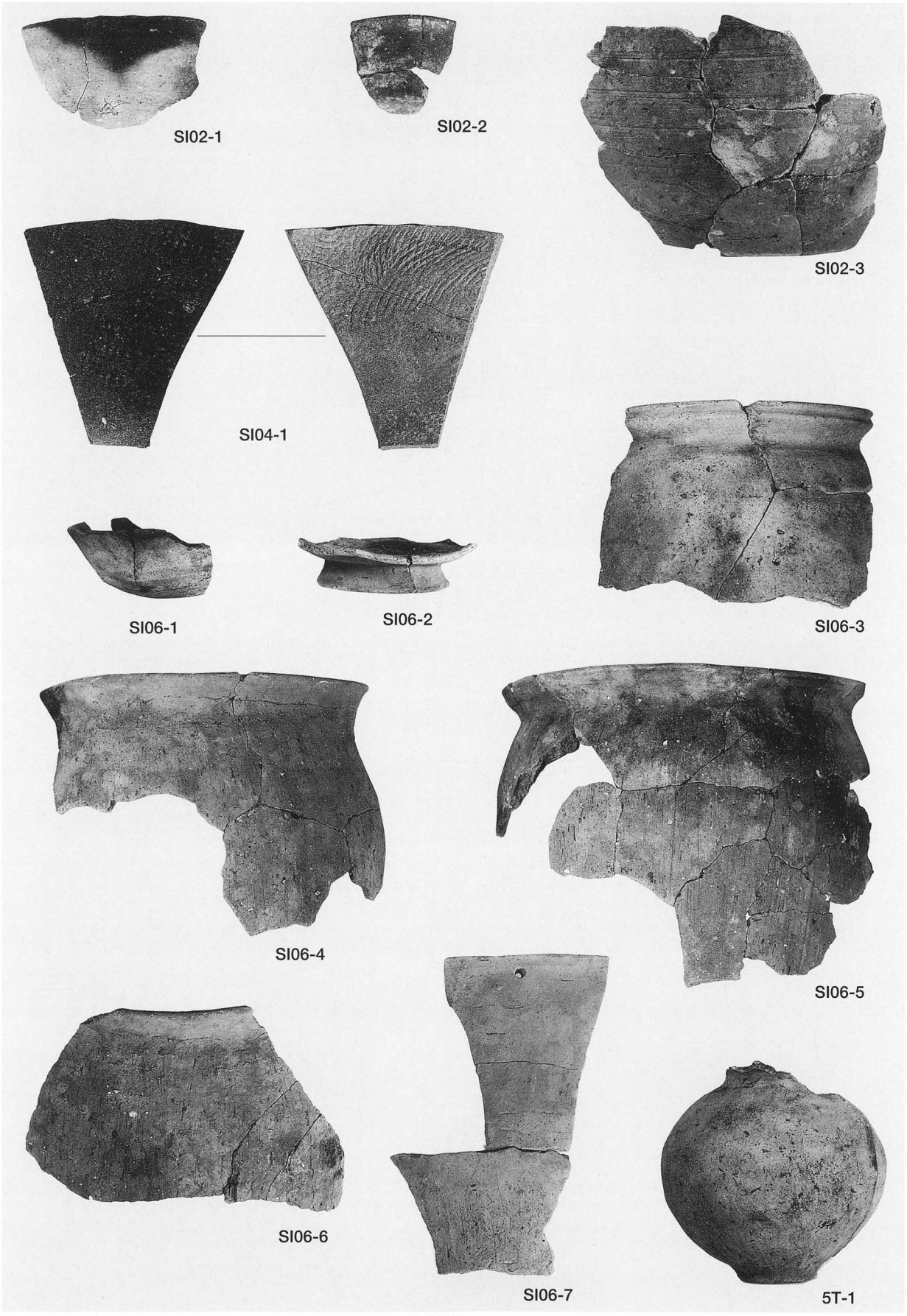

TM01-1
TM01-2
TM02-1
TM02-2
TM02-3
TM02-4
TM02-5
TM02-6
TM02-7
TM02-8
TM02-31
TM02-32
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
SI03-1
SI03-2
SI03-3
SI03-4
SI03-5
SI03-6
SI03-7
SI03-8

出土遺物 1


SI05-1
SI05-2
SI05-3
SI05-4
SI05-6
SI05-5
SI05-7
SI07-1
SI07-2
SI07-3
SI07-4
SI07-5
SI01-1
SI01-2
SI01-3
SI01-4

出土遺物 2

PL 8


SI02-1
SI02-2
SI02-3
SI04-1
SI06-1
SI06-2
SI06-3
SI06-4
SI06-5
SI06-6
SI06-7
5T-1

出土遺物 3

抄　録

ふりがな	いたどういせき
書名	板堂遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	高野浩之
編集・発行機関 所在地	筑西市教育委員会 〒308-0021　茨城県筑西市甲862番地1　　TEL 0296-22-0183 山武考古学研究所 〒286-0045　千葉県成田市並木町221番地　　TEL 0476-24-0536
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いたどういせき 板堂遺跡	いばらきけんちくせいしおりもと 茨城県筑西市折本 あざいたどう 字板堂536-2,539-1, 540-5	206073	36° 21′ 12″	139° 58′ 12″	2005.09.05 ～ 2005.10.03	1,594	工場施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
板堂遺跡	古墳 集落跡	古墳時代 古代	竪穴住居跡 古墳 土坑 溝	土師器、須恵器、砥石、耳環、刀子、玉類（管玉・棗玉・臼玉・小玉・丸玉）	古墳2基検出。

要　約	遺跡内で古墳群の所在が明らかとなる。

資料の取り扱いについて

項　目	内　容
水洗い	・出土遺物全てについて行った。
注　記	・インクジェットプリンターを使用した。 ・遺跡略号（ITA）・検出遺構（SI：住居跡・TM：古墳・SK：土坑・SD：溝）・出土地点（No.、フク土、表採）を注記した。 ・土器細片については、同様の内容を明記したビニール袋に収納した。
復　元	・接合は接着剤を用い、出来る限り行った。
実　測	・出土遺物は実測・トレース・版組みを作成し、報告書に掲載した。
台　帳	・図面台帳、遺物台帳、写真台帳があり、それぞれの資料が検索可能であるように作成した。
出土遺物 収納状況	・出土遺物は、報告書使用と未使用に分け、未使用遺物は台帳記載遺物とその他の遺物に分けてコンテナ・あるいはダンボール箱に収納した。各箱には箱番号・収納内容を明記した。
資料の保管場所	筑西市教育委員会

茨城県筑西市
板堂遺跡
発掘調査報告書

印　刷　平成18年3月25日
発　行　平成18年3月31日
編集・発行　筑西市教育委員会
　　山武考古学研究所
印　刷　㈱文化総合企画
　　TEL.0476-93-0593